

249

344

岡山名所圖會
完

山圖
免發舍證細



持29

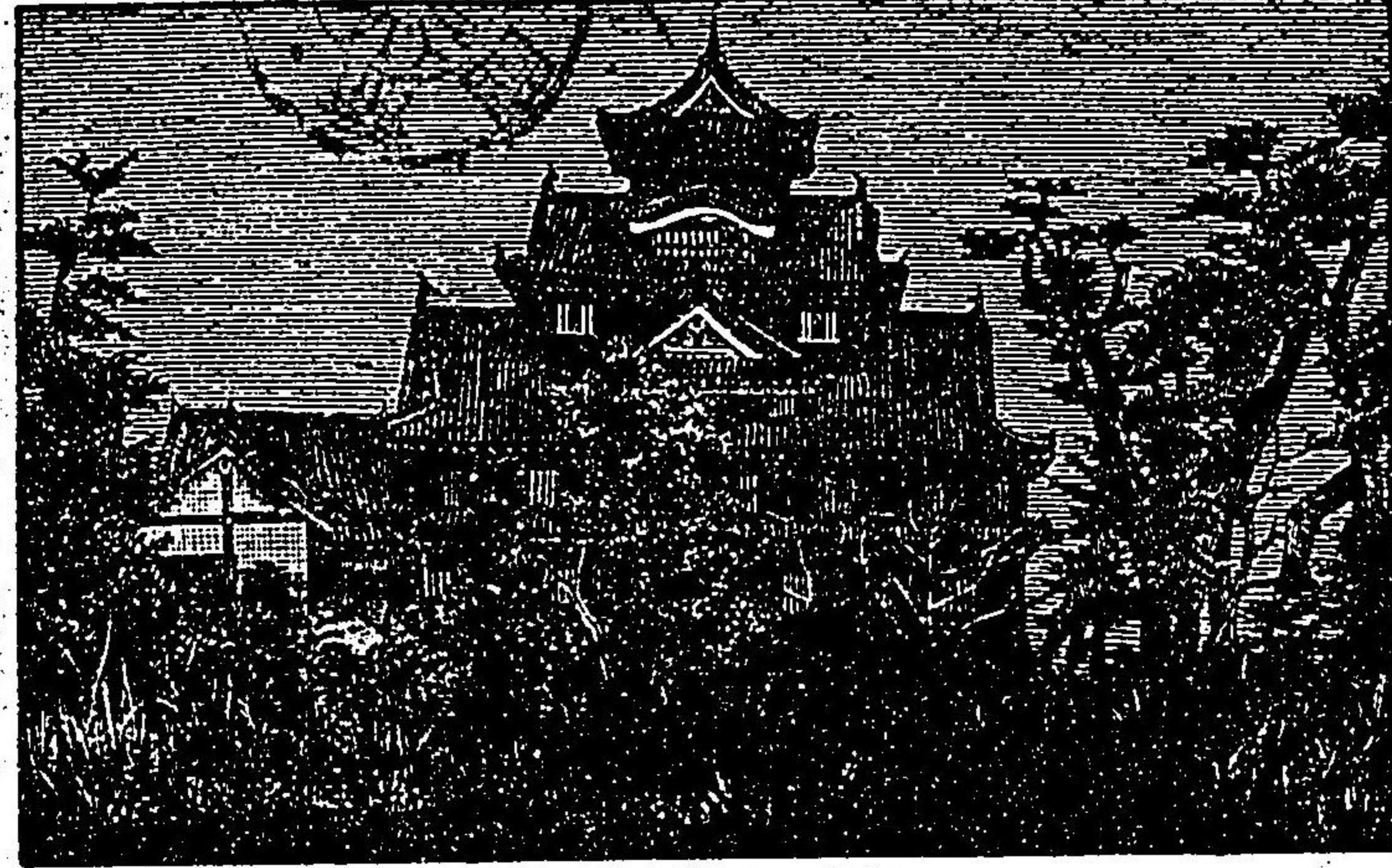
522

岡直盧大人序
讀紫樓主人著

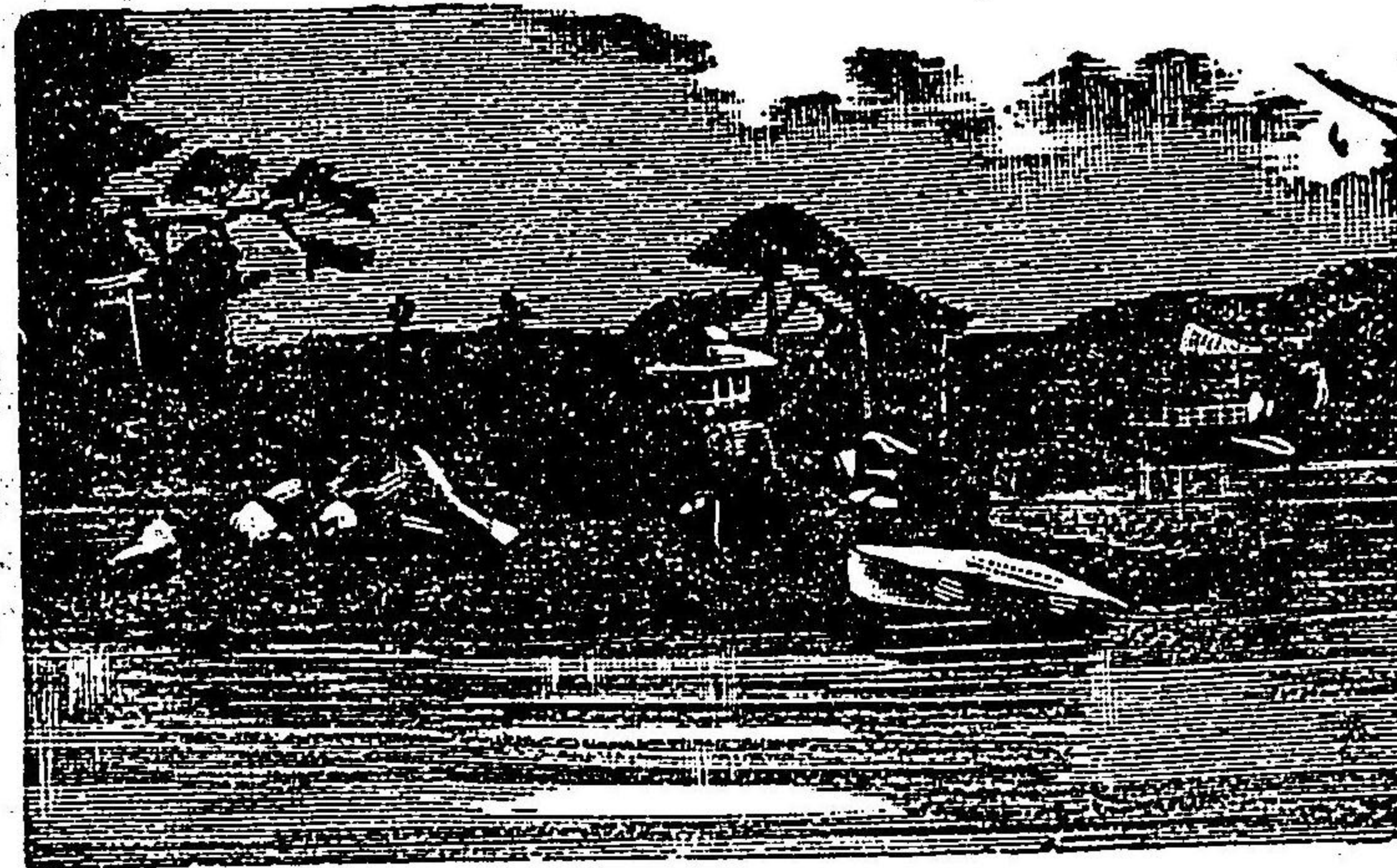
訂正
增補
岡山名所圖會

發行所

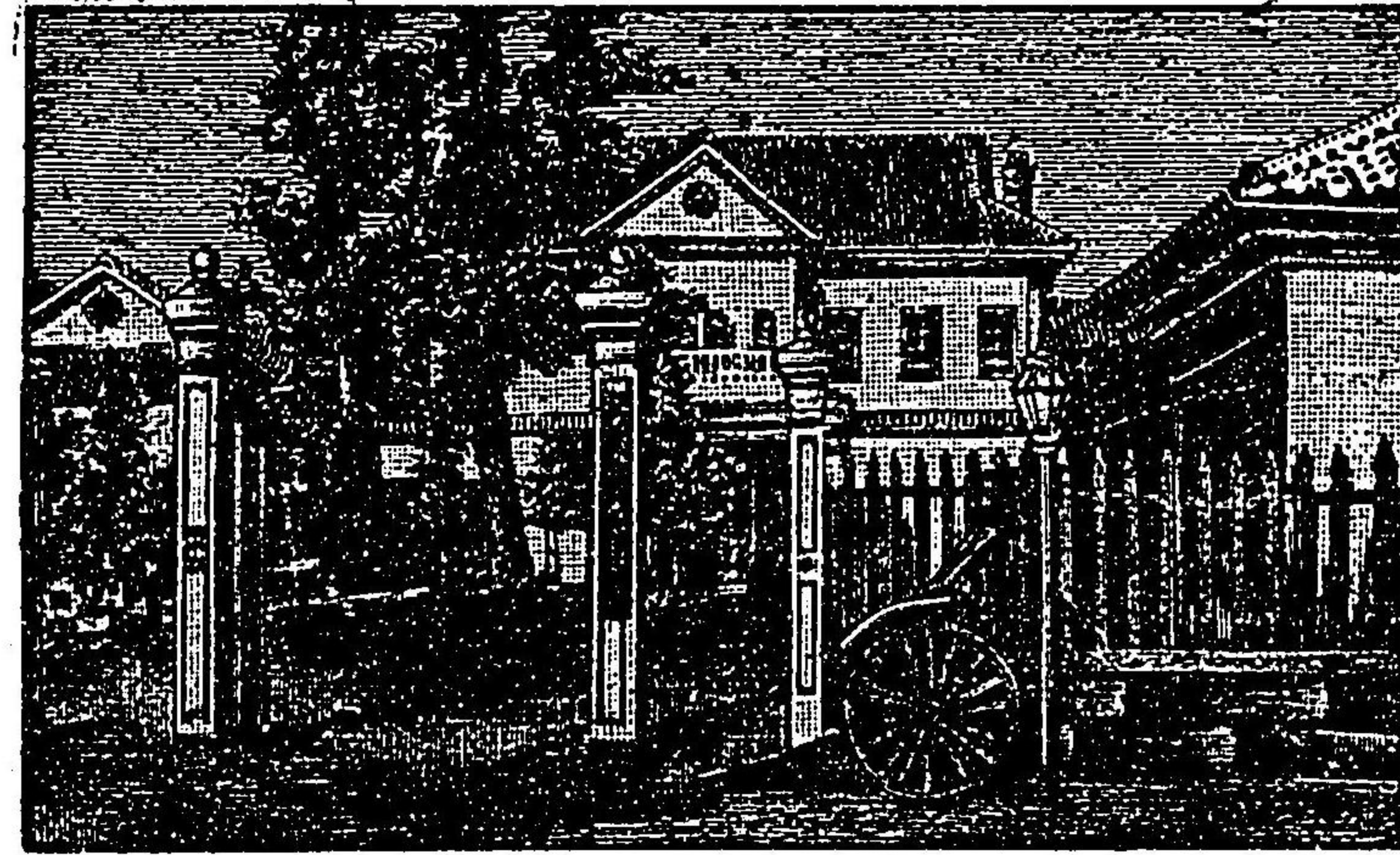
細謹舍



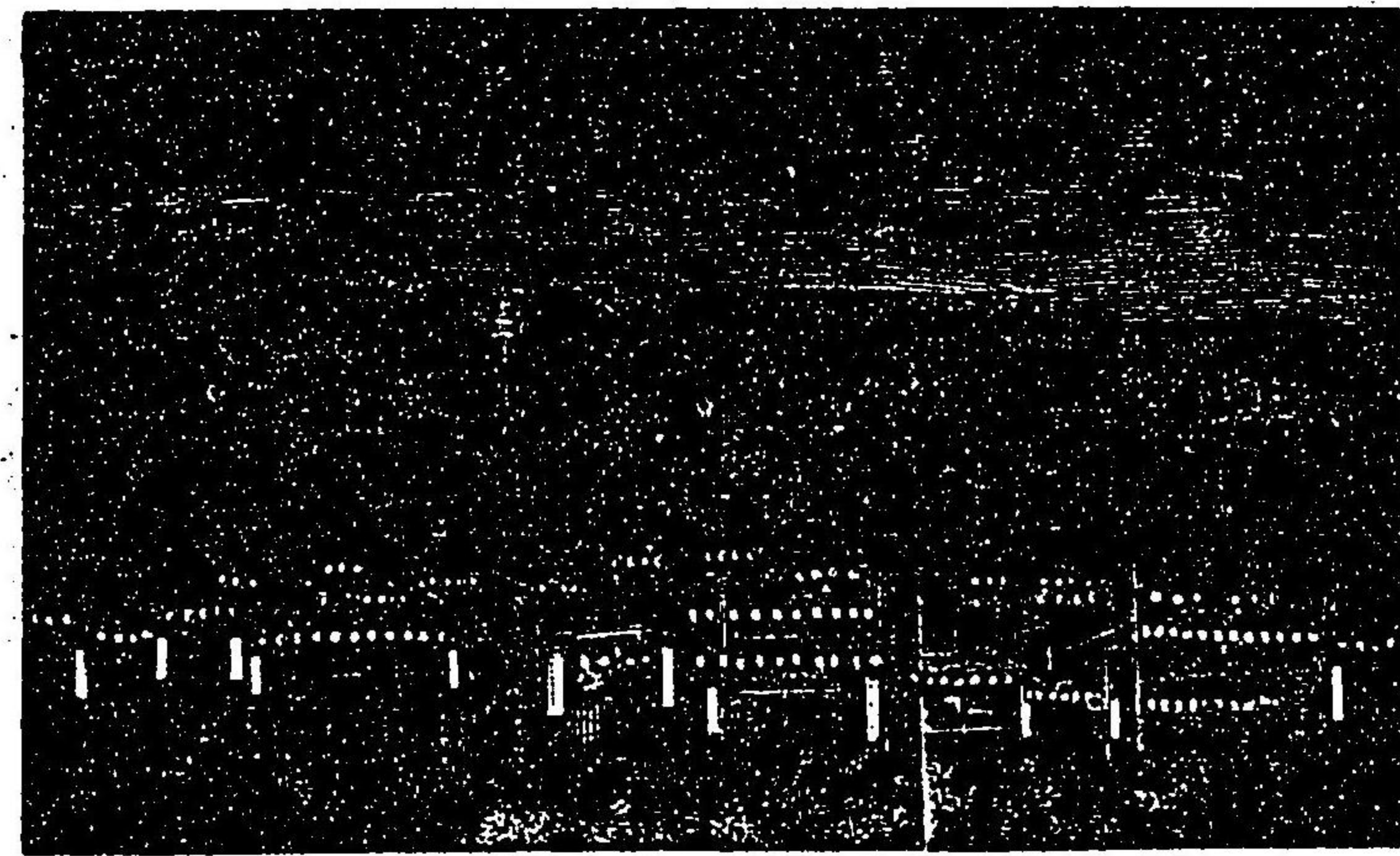
(城 山 岡)



(島 之 中 園 樂 後)



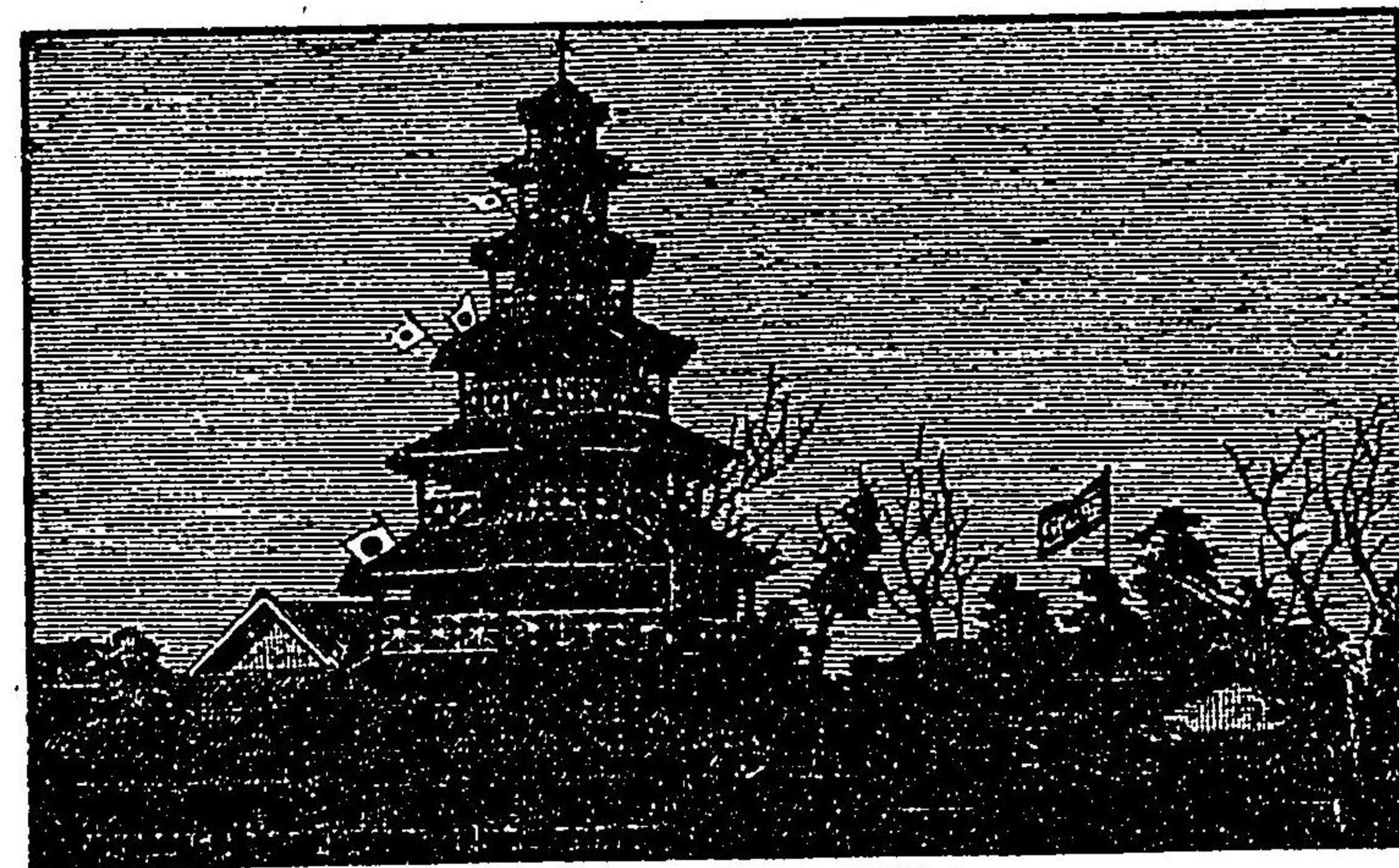
(庭 縣 山 岡)



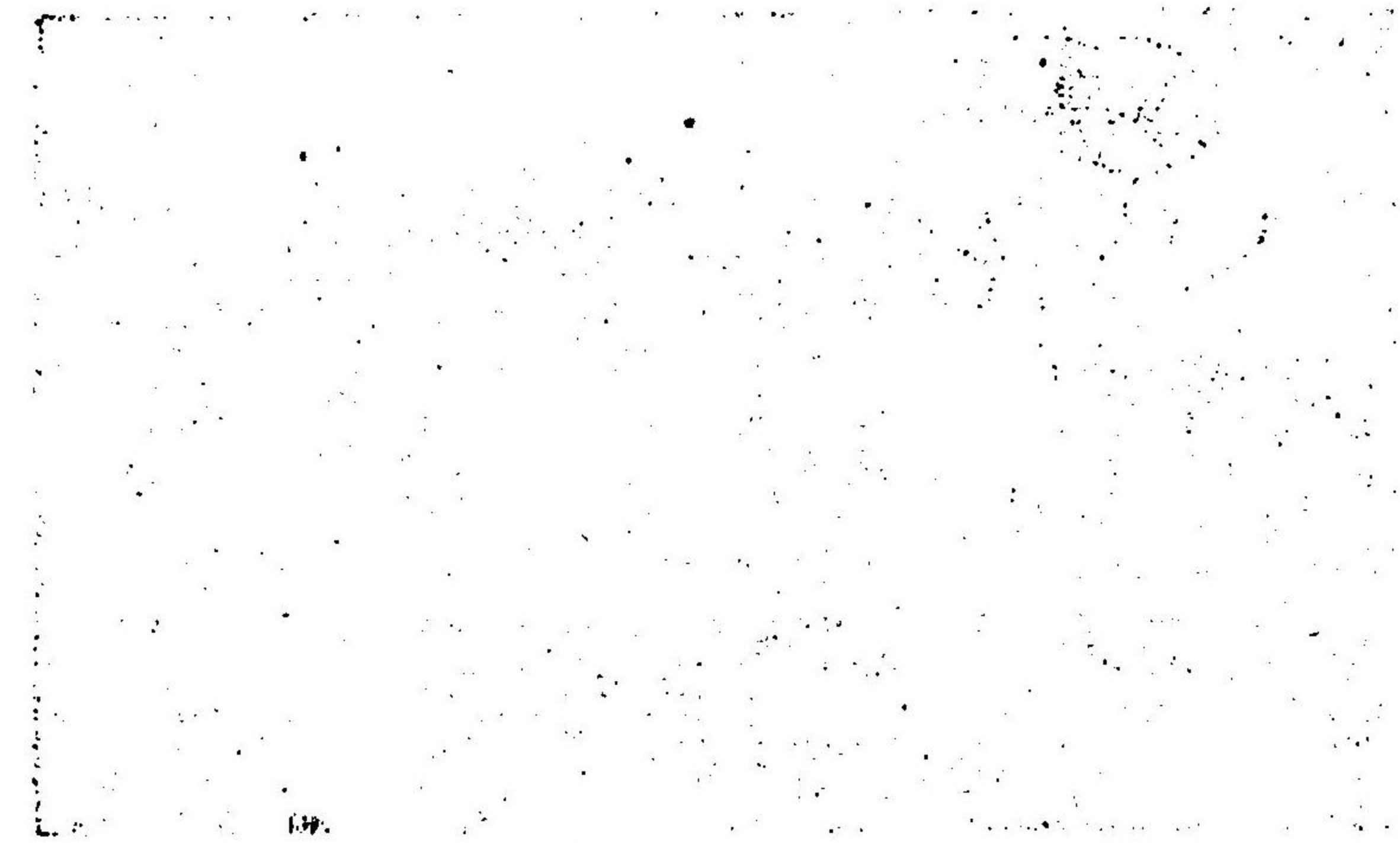
(景 夜 橋 京)

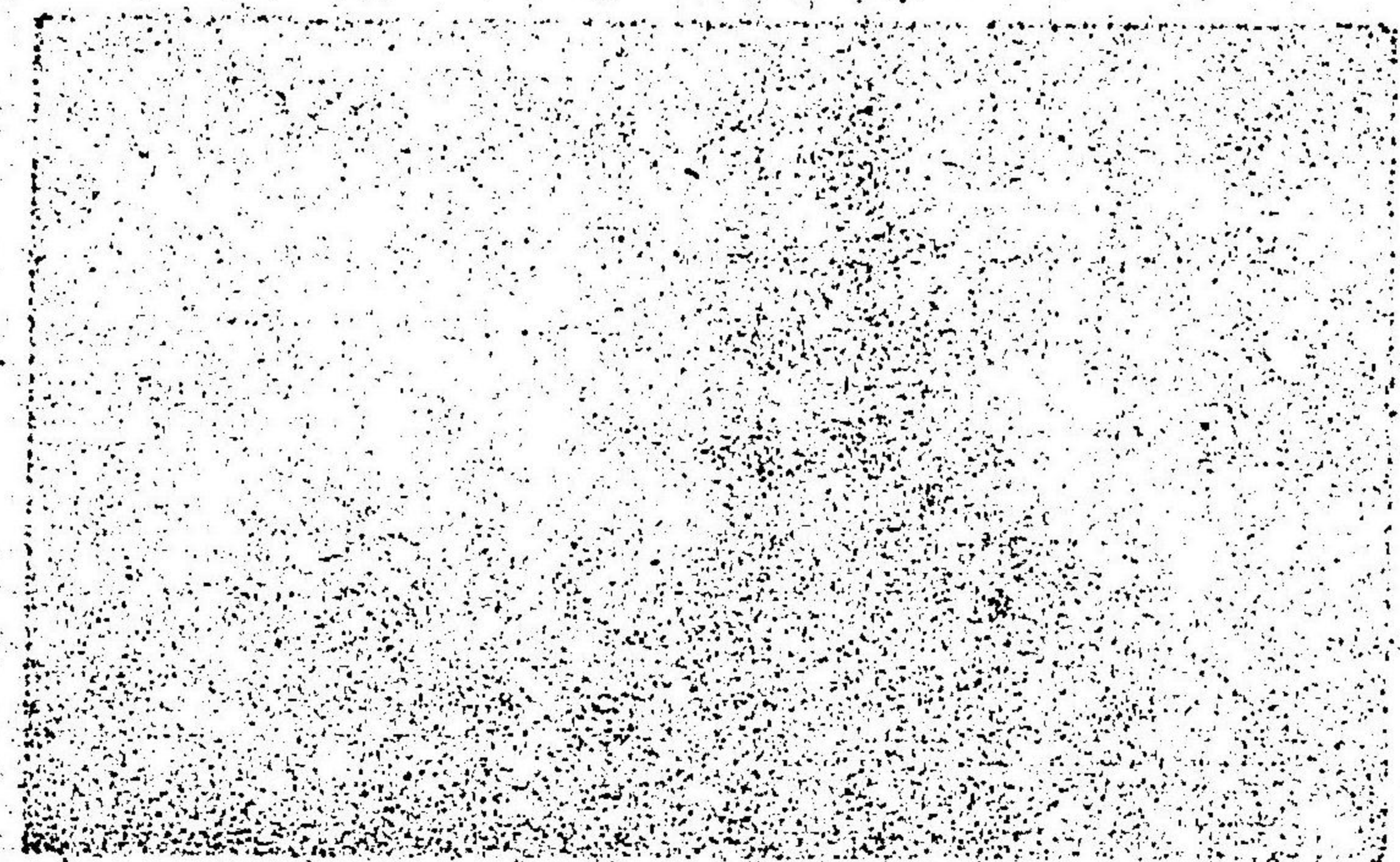


(部學醫校學等高三第)



(園公亞)





岡山名所圖會序

玉敷の京都わたりにはいさゝけの所にてもうれの名所圖
會くれの名所案内などいふものゝあまたありて鳴神のと
ほどにきこゑたるも中へ古きあなどとははてし
國にころたほかめれをれどうもれ木のうづもれはてし世
に忘れぬはげにあかす口をきこになんこに我岡
山の里はかげとも眞中より昔より名におふ山の世
にたかくきこゑたるもいかんせんかた天さかるひなに
あれは忘る人なくてやみぬるころまたいと口をけれも
るを今世の中ひらけゆく御代の眞盛に舟より車より海
に陸に道ひらけて鳴神の遠きわたりの人等もたやすく

かよふことゝはなりぬされとどみにきたらんにはいつれ
 よりまづ見もてゆかんだつきくなければことゝにめつら
 き所々をあけられにきく圖をさへ加へて岡山名所圖會と
 はなづけられたりげにめてたきふみにしてこれやこのひ
 らけゆく道の志をりのかたはしともなりなんものうとよ
 ろこひうれしつゝかくいふものはいくひのかきつのであ
 るに岡直廬

増訂正岡山名所圖會目次

● 序説	一頁	● 旭川鉄橋	十頁
● 岡山停車場	三頁	● 防水工事	十頁
● 岡山縣尋常師範學校	四頁	● 御崎神社	十一頁
● 岡山監獄拘留監	六頁	● 後樂園	十二頁
● 弘才尋常小學校	七頁	● 岡山縣廳	十七頁
● 瑞雲寺	七頁	● 亞公園	十八頁
● 淨覺寺	七頁	● 岡山神社	十九頁
● 伊勢神社	八頁	● 石關	二十一頁
● 御行旅所	八頁	● 濠渠	二十二頁

穴門	二十二頁	岡山縣測候所	二十八頁
石山	二十二頁	岡山縣病院	二十八頁
岡山高等小學校	二十三頁	第三高等學校醫學部	二十八頁
芳春館	二十三頁	岡山電燈會社	二十九頁
觀風閣	二十四頁	中の町	二十九頁
岡山城	二十五頁	上の町	二十九頁
岡山尋常中學校	二十六頁	下の町	三十頁
岡山製絲會社	二十七頁	岡山郵便電信局	三十頁
岡山精米會社	二十七頁	榮町	三十頁
行餘館	二十七頁	山陽新報社	三十頁
荒手屋敷	二十八頁	岡山警察署	三十頁

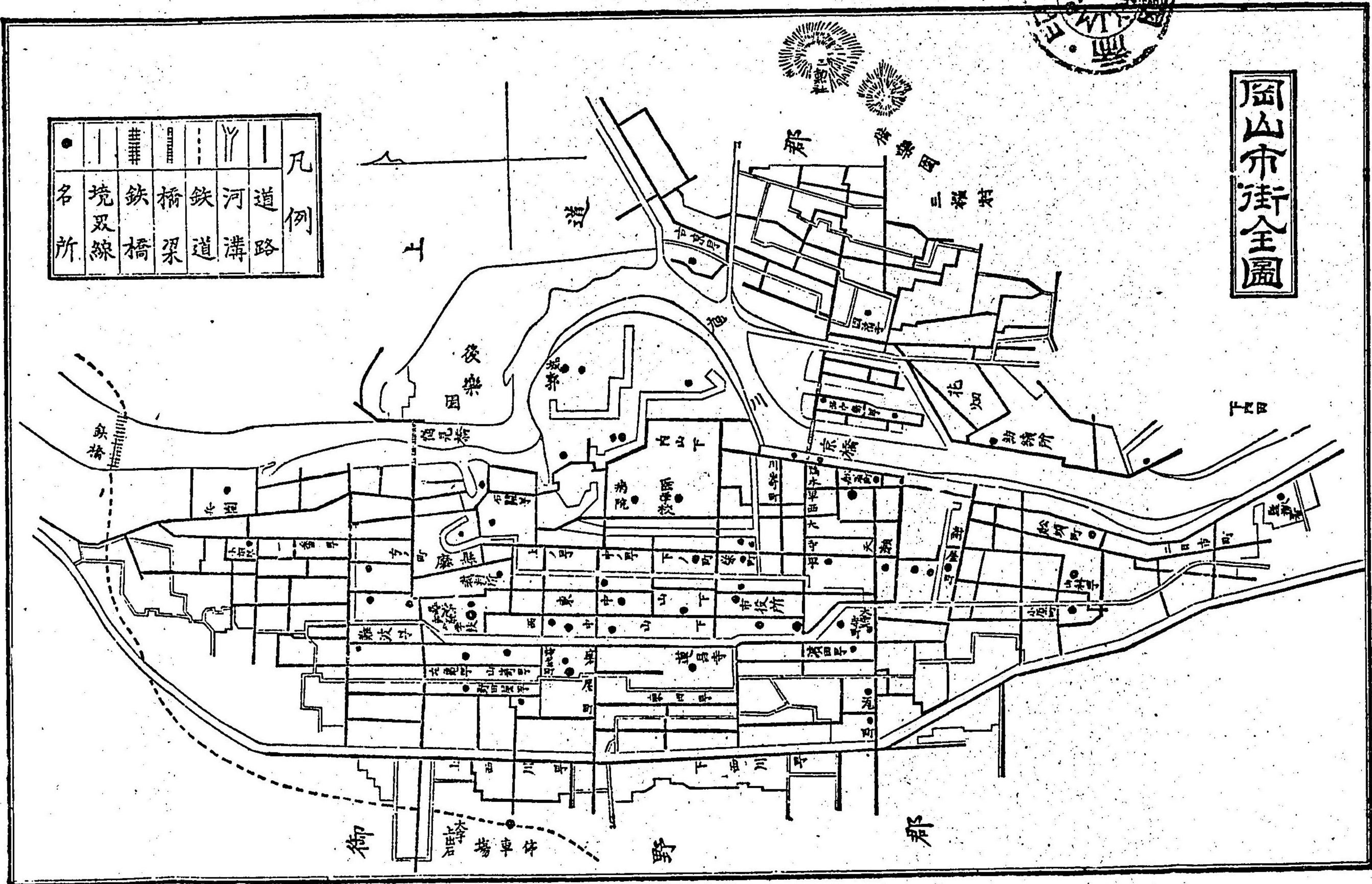
鐘樓	三十一頁	旅宿	三十五頁
紙屋町	三十一頁	中橋	三十五頁
西大寺町	三十一頁	榎檀稻荷神社	三十五頁
橋本町	三十一頁	環翠尋常小學校	三十五頁
四海樓	三十二頁	小橋	三十六頁
京橋	三十二頁	國清禪寺	三十六頁
魚市場	三十二頁	東山公園	三十六頁
納涼	三十三頁	東照宮	三十七頁
中島	三十三頁	玉井宮	三十八頁
遊廓	三十四頁	三勳神社	三十九頁
劇場旭座	三十四頁	少林寺	三十九頁

● 瓶井山	四十頁
● 行幸堤	四十頁
● 岡山紡績會社	四十一頁
● 岡山精米會社	四十一頁
● 三幡港	四十一頁
● 白魚、蜆	四十一頁
● 福島港	四十二頁
● 住吉神社	四十二頁
● 春日神社	四十二頁
● 岡山監獄	四十三頁
● 魚市場	四十三頁

● 清輝尋常小學校	四十三頁
● 妙勝寺	四十四頁
● 本願寺	四十四頁
● 光清寺	四十四頁
● 菓子製造者	四十五頁
● 耐火煉瓦製造所	四十五頁
● 明習館	四十五頁
● 保護院	四十六頁
● 錦莞製造所	四十六頁
● 岡山米藺株式取引所	四十六頁
● 可眞町	四十七頁

● 花月亭	四十七頁
● 中國民報社	四十七頁
● 岡山市役所	四十七頁
● 黒住教會所	四十七頁
● 基督教會堂	四十八頁
● 千歳座	四十八頁
● 岡山地方裁判所	四十八頁
● 西中山下	四十八頁
● 直稅分署、間稅分署	四十八頁
● 大隊區司令部	四十九頁
● 岡山日報社	四十九頁

● 深抵尋常小學校	四十九頁
● 松の江樓	四十九頁
● 劇場高砂座	五十頁
● 大雲寺	五十頁
● 巴玉座	五十頁
● 瓦町	五十頁
● 景福寺	五十頁
● 正福寺	五十一頁
● 大供	五十一頁
● 黒住神社	五十一頁
● 報恩寺	五十一頁



增訂正 岡山名所圖會目次終

● 蓮昌寺	五十一頁	● 料理屋と藝妓	五十六頁
● 藥師院	五十二頁	● 旅・店	五十六頁
● 岡山寺	五十三頁	● 西川	五十六頁
● 岡山大林区署	五十三頁	● 備前紡績會社	五十六頁
● 本行寺	五十四頁	● 倉庫部	五十六頁
● 妙應寺	五十四頁		
● 金比羅神社	五十四頁		
● 劇場柳川座	五十四頁		
● 一富士	五十四頁		

訂正 岡山名所圖會

讀紫樓主人著

序 說

南、平砂渺々として、東、大河漫々として尽きず、田園西に開け、茫漠とし、望瀾、村家北に散り、落々として依稀たり。これ往時の岡山にあらざるや。而して今や方有餘の家屋軒を並べ、鐵路東西に開通し、漁船日夜に往來し、全市に住するの民、四万五千有餘、玉業興り、商業進み、その繁華觀るに足るべきものあり。抑も浮田氏のこの城を築くに、や、豈、かくの如くなるを期せんや。池田氏、三百年、ここに居城を占め、三十餘年の封土を提げて、民に臨む。その土の漸く變りて、舊時の面目を改むるものあり。性しむを須ひざるなり。惟ふに盛衰は天の數なり。今の岡山の繁華は將來如何かなるべき。地は中國の上位を占め、交通の便なる、その比、穠にして、氣候の宜しき、之に較ぶるもの少し。これを自然に問はゞ、そのますます繁華を看るべき

や、もとより論を俟たざるなり。然れども、人為は自然を翻するなり。わが岡山の住民にして、その自然を頼み、悠々として閑日月を送らば、一夢の中にその繁華は消失して、他に移るべき耳。看よや、鐵路開けて、わが岡山の商勢は漸く變せんとするものあるを。盛衰の機、一たび動けば、看すくその光景を一變するなり。而してその機を運轉するものは、實に人に在りて存す。わが岡山の地たる、前途望多しといふを得べしと雖も、而も棄ててこれを顧みざれば、空しく往時の繁華を追懷して、死兒の年齒を數ふるに至るべき耳。ア、他頼の時代は既に去りて自頼の時代來れり。藩主の威武を以て繁華を維持したるは、三百年の夢焉耳。醒め來らば、これが住民たるもの、愈上繁華の域に進むの途を求めざるべからざる也。抑も岡山の工業は如何。岡山の商業は如何。觀察一番、われらの満足すべからざるを知る。知らず、後來盛衰の機如何か動くべき。その之を論ずるは、この書の本旨にあらず。われは今の見るところを寫して、一はこの地に遊ぶもの、指南に供へ、一は他年に至りて今日を視れば、その盛衰如何あるべきかを知るの便に供へんと欲する耳。若しこれ記事の詳略あるは、見聞の廣狹如何によるものにして、別に意あるにあらざる也。

岡山停車場 (上出石)

鐵路開けて交通繁く、昨は十日を費して、僅に達したるの地も、今は一日を出でずして、早く往くことを得。然ればこの便によりて、西より、東より、來り集るもの、往時の比にあらず。わけて岡山は中國の一都會、東は神戸、大坂、西は京都より、西は廣島、山口サテは九州より、商賣のため、漫遊のため、日に入り込むもの、その數頗る多く、これ等は多く山陽鐵道に便を假れば、停車場の般賑は、また近傍に稀なるところ。停車場は岡山の市街の西に接し、御野郡石井村上出石の中に在り。近き頃まで、この邊はすべて田圃なりけるに、山陽鐵道會社にて、廣く地面を取り圍み、停車場の地位を、これに定めてより、人々眼をこゝに注げ、その近傍に家屋を建築し、荷物問屋に旅人宿、料理店に賣茶亭、軒を並べて客を招き、涼車は日に十數回往復すれば、その景狀また往時のごとくにあらず。數十輛の人力車は、常に轅を並べて客を待ち、一呼すれば、健脚疾走、意に隨はざるなく、その岡山に入る道路は、停車場を置かれし後、有志者の開く

ところ、幅員廣くして碇のごとし。而して中國鐵道及吉備鐵道の停車場も亦將にこの地に設置せられんとす。將來の繁華知るべき也。停車場を出て、北すれば、直に國道に出づるべし。國道より西すれば備中地方に至るべく、名高き吉備津神社または稻荷神社もこの道よりし。東に向へば岩田町、旭川の支流なる西川の流あり。橋を渡りて富田町も過ぎ往けば右の方に

岡山縣尋常師範學校 (西中山下)

の寄宿舎、一帯に建築せられ、構造二層にして、素樸清潔。これより南一構は、みな學校の區域内とす。この學校は往にし昔、寛文八年岡山藩主池田光政侯、圓乘院及び諸士の家邸拾七軒を、他に移して、設立したるものにて、同九年七月二十五日落成し、南六拾三間半、北百十間、南北の長さ百拾貳間にして、講堂は九間拾一間、中堂は三間に六間、食堂は六間に九間。その東西に學舎を設け、東は五區にして各三間に五間、西は五區にして各三間に六間とし、何れも柳木を以てその舎に名く。その東に在るものは、曰く菊舎、曰く蘭舎、曰く梅舎、曰く橘舎、曰く梧舎。その西に在るものは、曰く杉

舎、曰く槐舎、曰く柳舎、曰く竹舎、曰く松舎。その東に在るものは武を講ずるの舎とし、その西に在るものは文を肄ふものとす。その他外部に役員官邸有り。西に一道の馬廄を設け、文武講習の便備はらざるなく、寛文九年七月二十五日開校の式を舉行したるより、未だ曾て喧嘩の聲を絶たず。維新以後普通學校と稱し、専ら洋學を講習し、大に學風を一變したりしも、官の保護を絶ち、改めて遺芳館と名け、僅にその遺響を嗣ぎしが、師範學校の設立するに及び、この家屋を用ゐることとなり、中學校もまた、ここに設置し、家屋の漸く廢頽するを以て、講堂等の他は皆之を改築し、更に從來の校地の西に在る濠埋地を入れて、運動場となし、表門の東南に在る邸宅を、購ふて幼稚園を建築し、大に面目を改めたり。然れども樹木等は今は尙ほ舊時の觀を存し、表門を入れば、十數株の老松、諸所に蟠屈し、偃蓋天を掩ふて、清風掬すべく、講堂に入るの前、一小池あり、名けて半球といふ。その形、球を割きたるかごときを以てなり。その四邊環らずに石柵を以てし、中央に石橋を架し、渡れば一面に瓦を敷き、左右より講堂に通ず。その間一小區の地あり。小石を敷きて点塵を止めず。その上講堂の楹間に「學

校」の二字を書したる扁額を掲けたるは、往古より唯學校と唱へて、別に名を命せざるを以てなり。師範學校は地の東部を占め、中學校は地の西部を占めたりしも中學校の舊城内に移されてより専ら師範學校に歸し、附屬幼稚園は一區を畫りて其の南に在り。抑も芳烈池田侯の初めてこの國に封を移さるゝや、戰國時代を距る遠からず、心を學に傾くるもの少し。侯獨りこの間に在りて、遠く師を藤樹の門下に招き、經世の學を講せしめ、今に至るまで、貳百有餘年。その遺徳流風の尙は存するを見る。ア、亦、欽すべき矣哉。

岡山監獄拘留監 (弓ノ町)

岡山學校の北に當りて、一廓あり。西南、板扉を以て囲み、東に表門あり。之を岡山監獄拘留監とす。この地、岡山藩の政を執りしとき、牢獄を設けたる處にして、白晝尙は人の往來するものと稀に、陰森として自から凄氣の窟を襲ふを覺たりしも、今は四通八達の衝に當り、大に面目を改めたり。その死刑を執行する、今尙この監の境内にて、その西壁の外より望めば、絞殺臺の見ゆるあり。これより北に進めば右に、

弘西尋常小學校 (弓ノ町)

あり。初め岡山市街に五小學校を置くや、この校を弘西小學と名け、第一番學區に屬したり。明治十八年火を失して家屋蕩盡す。有志の徒之を憂ひ、更にその隣地を購ひ、大に境域を廣め、新に校舍を建つ。之を往時に視れば、頗る便利にして、動運場も廣く、稍や完備したるものといふべし。その校門の前に小石橋あり。之を渡りて北すれば、町名を三番町といふ、番町は一より八までに區畫し、皆舊藩士の邸宅たり。三番町の右側に

瑞雲寺 (三番町)

あり。金五中納言秀秋の靈を祭り、また肥後より加藤肥州清正の像を迎へ來りて之を祭る。當時俚語あり、いはく、「備前岡山三番町瑞雲寺、肥後からござつた清正公」云々、豈が三人立ちました、コチャキーク、と以てその信仰せしもの多かりしを見るべし。今は寺院漸く衰頽し、人の參詣するもの少なし。その北に

淨覺寺 (小畑町)

あり。眞宗に属す。今は廢願して寺門跡を止めず。之を右に折れて、小畑町に出で、更に北すれば、

八

伊勢神社 (小畑町)

あり。伊勢神社は岡山市中の有名なるものにて、境内稍や廣く、往時岡山藩主の尊崇するところ、神官亦、地位高く、禰宜之に副ひたり。維新以後縣社となりたるも、その氏子たるもの少く、隨うて舊時の面目を維持する能はず。境内に松杉の年古りたるものあり。中に一老松あり、蜿蜒として龍の蟠まるがごとく、その傍に一大楓樹あり。然れども人の之を賞するものなし。社の表門より東して、甬道を上れば、宇兵團といふ。兵團は往時

御行旅所 (兵團)

といふ。御行旅所は旭川の畔に在り。東は芥子山に對し、南は岡山城及び後樂園を臨み、北は秦嶺龍山を眺め、西は通路に接し、四面繞らすに堤防を以てし、之に植うるに松樹を以てす。老幹蟠屈して、互に威を争ふ。概皆な二百五十年前の物。松籟は水聲に

和し、時に棹歌と合す。美作國眞島、大庭の兩郡、若くは備前國赤坂其他諸郡より降るところの高瀬船は、必らず此處に集りて用を辨し、多きときはその數、百艘に達す。兵團の諸商店は多く此輩の者を花主とし、その利するところ頗る大なり。抑も御行旅所は寛永廿年岡山藩主池田光政侯東照公を東山に勸請し、正保三年その祭禮を執行せしむるに擬するものにて、祭禮の當日は東山より神輿を奉りて此の地に來り、諸士之を警衛し、その式の嚴なる、蓋その比稀なり。明曆二年九月初めて流鏑馬十番を命し、寛文六年より同九年に迄り、供奉の諸士甲冑を着け、同十年より熨斗目麻上下に改めたるを以てもその祭典の鄭重なるを知るべく、その域内は總て結構艸を裁る、倉庫あり、馬場あり、射場あり。以て維新の際に至れるも、世の漸く移るにしたかひ、この祭典も廢せられ、域内は一時兵士の屯集所となる。是れ兵團の名の因て起る所以にして、西に連なる竹林は總て伐採せられて、家屋を建築し、兵士の營所となす。藩廢せられ、縣置るに至りてや、域内は總て開墾して田圃となし、家屋は市民の住居するところとなり、今は一の町を爲し、曾て御野郡南方村に属したるも、市町村制の施行するに當り、更

めて岡山市に編入したり。この地別に観るべきものなしといへども、亦是封建時代の遺跡。

旭川鉄橋 (南方)

兵團の北に方りて、僅に二町隔りたる地に、虹のごとく、旭川の上に架するものを山陽鐵道旭川の鉄橋とす。旭川は一に西大川といひ、岡山縣下第一の長流にて、水源より海口に迄る、三十二里二十八町餘、沿岸の村落は之を仰ぎて飲用に供し、田圃の灌漑亦一に之に依り、舟楫の便頗る宜しく、産するところの魚は香魚を以て第一とし、鮎、鱈、鰻、鯰の類、之に次ぐ。その架するところの鉄橋は貳百間餘にして、山陽鐵道線路の中に在りて、稀に見るところなりとす。

防水工事

岡山の地たる、東、旭川に沿ひ、水利の便多しと雖も、雨もその害亦少なしとせず。霖雨歇まず、水聲漸く加ふるに至れば、濁浪天に滔り、時に堤防を破壊し、家屋を蕩盡し、人命を亡ひ、財産を没し、全市の民の業に安んぜず。明治二十五年の如き、その

尤も甚たしきものにして、その慘憺たる光景亦た言ふに恐びざる也。若しこれを放棄して、更に治水の策を施さずんば、全市を擧げて覆没の災に罹らしめんも知るべからず。有志の徒深くこゝに憂る所あり、防水堤防を築きて、以て之を防かんとす、乃は之を地方議會に諮り、議決して初めて工を起す、北は旭川鐵橋に起り、南は岡山神社に至るの間個人の家屋を買収して、これが地盤を鞏固にし、舊來の道路より高むること三尺有餘、今道路に沿うて、高く築かれたるもの實に是なり。岡山神社以南内山下を経て二日市に至るの間は、或は道路を高め、或は舊來の堤防を高め、稍防水の路を得たり。而かも治水の道は根原より治めずんば、竟にその功無けん。路に當る者思はざるべけん乎。旭川の西岸に沿うて北に往けば、その窮まる處に一の神社あり。之を

御崎神社 (北方)

とす。地は御野郡北方に屬するもの。その氏は岡山市の中にも存し、境域廣からずといへども、參詣するもの少からず。此より左に折れ、竹林に沿ふて南すれば、再び兵團に出で、尚ほ上出石町を経て中石出町を南すれば、此間所謂防水工事堤防あり。その左に

木橋を認む。之を後樂園に入るの通路とす。

後樂園 (古京町)

磯川三十餘里、源を美作國龍王池に發し、回り環りて、岡山の街を貫き、未は流れて海に入る。其東西に沿へる地の名勝、古跡、神社、佛閣に富めるは、數へ擧るに遑あらず。中ごろの最も世に知られしは後樂園にて。岡山城の北に當り、流を隔て、一區を劃し、東西南北、四方を竹林にて圍み、北は田圃に接し、東は古京町に面し、西は流を隔て、出石町に對し、こゝに橋梁ありて、架す。名けて鶴見橋といひ、近き頃設けたるものにて、往古は磯川の西岸に在る卷石の北の端より、假橋を架けたりしも、今は廢れて、こゝに鶴見橋を設くることとなりしものにて、直に園の北門に通ずるにより、その便利少からず。橋の長さ七拾間餘にて、まことに粗造なるものとす。抑も園は貞享三年、備前國主左少將池田綱政朝臣、その臣津田重次郎永忠に命じたまひて、工事を統轄せしめ、翌四年の十二月、初めて着手することとなり、反別凡ろ一万七千七百餘歩を畫り、その後區域の狭きより、元祿三年三月に、又園の北、五千二百五十三坪を増加し、積

さて四千餘坪を合せ、總計貳万七千拾三坪餘となれり。此れ現今の後樂園にて、其の周圍九百三十貳間、園の中央を東西に計れば、長さ百九十七間餘、南と北との廣さは百十七間餘なり。地勢は西南の方較や高くして、岡のこゝと、樹木生ひ茂りて、深山の趣あり。東北の方は平坦にして、或は松林蔭鬱とし、或は園外を望むべし。園は初め、茶屋屋敷と呼び、後には單に後園といひ、明治四年二月今の名に改めしが、尙ほ池田家の有なりしに、同十七年の二月、政府池田章政侯の請を許して、地を納め、岡山縣にて保存することとなりて、一般に公園と思ふこととなりたり。但園の北に一小區を畫し、閑谷神社遙拜所ありて、こゝのみは、今も尙、池田家の所有に屬し、妄りに入るを許さず。曾て北門の北に牆を隔て、一亭あり。名けて暫軒といふ。今は其の斷礎たも留めざるも、此亭や素有名のものにして、屋を二字に分ち、構造素樸なれども風致あり、窓を披けば、直下に磯川を望み、北には秦嶺諸山を眺め、最も避暑に宜しく、往時暫軒風とて、後樂園十勝の一なり。園には奇樹異州各所に散在し、四時花無きことなれども、禽獸の類は、往古より鶴を養ふのみにて、その多きときは十餘に及びけるが、今はその數

五六にて、晝は之を園裏に放ち、自由に踴躍せしめ、晩に及べば、園丁、之を驅りて籠屋に入る。嘹唳の聲、九阜に響き、仙境をして、一層風趣を増さしむ。第二門に入るの前層樓の屹とし北に立つあり。これを物産陳列場とす。近年岡山縣の建築する所にして其の構造彫俗にして、この園に適せず。集る所の物産特りこの縣下に止まらず、参考として見るべきものなしとせず。陳列場に接する所の家屋は皆な往時園の吏員の住居せし所にして、今や其趣を異にせり。第二門を入れれば鶴鳴館ありて園中一の大廣間、岡山縣會を開くときは此を戯場に充て、其他諸種の總會には此を假る多く。其の東南に並ひ連るは延養亭にて、明治十八年車駕西巡の時玉座を設けし處にて、眺望最も濶くして、岡山城は高く南に聳へ、罌粟子、三椏其他の諸山は、東に方りて屏列し、朝夕紫翠を送り來るが中に、瓶井山に屹立せる三層の塔は、園に茂れる樹の中より隠見し、園の諸勝は概ね此より望むべく、亭の前には奇石多く、その間より矮き樹の簇り生て、礫川より引く水は、その中を横さまに流れ、前面は總て平地にて、結縷艸を植る列ね、春夏の交は一面に青き毛氈を敷くことし。延養亭の西北に在る家屋を樂唱といひ、その前に花

葉の池ありて、此邊幽雅比なく、巨石ありて、池に臨みて屹立し、高さ四間一尺周圍十尋に餘るべく、松樹ありて、巖腹に生へ、其奇狀觀るべく、その前後榭ありて、最早く紅染め、明媚掬すべく、此より西を花葉といひ、地勢高く秀で、喬樹千章、蒼鬱枝を交へ、四時日光を遮り、綠苔地を掩ふて、常に清風を貯へ、幽邃高遠にして、深山幽谷の趣あり。中に素樸なる家屋あり、之を茂松庵といひ、茶事を修むるに適す。その前に四天王堂あり。その東に地藏堂あり。その側を二色が岡といふ。此を過れば廣潤の地に出づ。竹林に沿ふて東すれば藤池軒あり。後は竹林を隔て礫川に隣り、前は池ありて、溝渠築回し、石橋を架て往來を通ず。軒に坐して眼を放てば唯心山東北に聳へ、澤池の水は溶々として、流清く、北林の松は青々として色深し。その東に藤架あり、その幹太く數十歩に及び、紫白色を競ひて花を垂れ、之に隣りて老梅一樹あり、臥龍梅といふ。その北に蘇鉄數十株あり。その下清く掃ふて一微艸を止めず。その東に渠を鑿ちて、多く燕子花を植る、板橋を交架す。蓋、參の八橋に擬するなり。八橋の北に一の樓閣あり、流店といふ。中に棧板あり左右に畫し、その中央に一條の水道を疏通し、奇石

を布置し、時ありて水を行る。その東は總て此れ櫻林にて、その數二百餘、春風駘蕩の時
 に方りては、香雲漠々として、園中の花此境を以て第一とし。之に隣りて梅林あり。幹
 皆な槎枒として苔蘚之を掩ひ、幽閑俗を離る。その東に一條の道あるを櫻の馬路といひ
 夫より南すれば利休堂あり。その前を花交濼とし、池あり、常に水を湛ゆ。櫻林の北
 に千入の森あり、楓樹數十株、天を掩ひ、秋霜一び至れば、滿目の錦繡燦爛として畫も
 亦及ばず。その東北に新亭あり、窓を披けば、園外の曠野總て眸裏に入る。園の中央に
 屹立するを唯心山といひ、園中第一の勝景にして、全山樹木繁茂し、亂石突起し、更に
 寸地を餘さず。山頂較や平坦にして遠望に富み、園中の勝景は論なく、遠く龍山の山脈
 を望み、時に瀟車の黒烟を吐きて走るを認むべし。側に小亭あり、唯心堂といふ。杜鵑
 花と躑躅と山の大半を掩ひ、初夏の候は紅白色を争ひ、その美、言ふべからず。山を北
 に下れば澤池ありて園中第一の大池にて、其の中に島嶼三あり。板橋を架して往來を通
 じ、小亭を建てて遊息に供す。四方に矮松を繞らし、怪石、白沙の中に立ちて、自から
 海島の趣あり。澤池の北に方りて、由加神社と慈眼堂あり。由加神社は拜殿、繪馬堂

、祭器の倉庫まで備はり、原、東京の池田邸に在りしを移せしなり。慈眼堂は池に向ひ
 て仁王門を建て、その側に梵鐘堂を築き、佛殿は巨石を疊て礎とし、石階を設けて、土
 下に便にす。堂の側に高さ二間餘周圍九尋の石あり、名けて烏帽子岩といふ。此より池
 に沿ふて往けば寒翠細響軒あり。園の風光を領せんと思はば、此邊よりすべし。此の北
 は總て松樹直立し、幹老ひ枝繁り、閑雅比なし。之に隣りて馬路あり、射圃あり。また
 延養亭に隣りて能舞臺あり。その竹家屋の結構布置、山水の光景眺曠等一々記さば一部
 の書とするに餘りあり。先にわれ後樂園詳誌を著はし細謹舎これを刊行したれば、就
 て見らるゝあらば、此の園の世に特出したるを知り、併せて雅遊の友となすに足らん。

岡山縣廳 (弓ノ町)

後樂園を出で、再び鶴見橋を渡り、左に折れて下出石町を過ぎ、石關町に出れば、右
 に大厦の屹立するあり。之を岡山縣廳とす。藩廢せられ、縣置かるゝの當初はその麓の
 邸宅を使用せしが、後この地に新築して移轉したるなり。傳へいふ、この地は岡山の市
 街未だ開けざるの時、一の沙山にしてその頂なり、と名けて天神山といひ、山嶺に天

満宮を祭る。後岡山藩主池田侯の支封池田家の邸宅となり、以て維新の時に至れり。この鎮座せしところの天満宮は貞享四年丁卯六月二十五日酒折宮の内に遷宮したりといふ。この地東北西の三方は濠を以て囲み、白蓮こゝに生し、盛夏の候は花盛に開き、人目を快うするに足る、山上には楓樹の頗る老ひたるもの數株あり。新霜初めて下りて漸く紅を染め、その色深きに至りて、遠くより之を望めば、一團の錦繡のごとく、夕陽相映するに至りては、粲然として中天に輝き、その景の佳なる、亦觀るべきものあり。然れども地、廳内に屬するを以て、固より人の縦に覽るを許さず。

亞公園 (石關町)

岡山縣廳の門に相對して、一廓を成すもの、之を亞公園とす。この地素と岡山縣廳の地に續きたるところにして、同トく池田家邸宅の有りし地なり。後岡山縣病院を設くるに當りてや、この地に病室を築き、濠を隔て事務室等に通せり。明治二十四年病院を内山下に移すや、この地を拂下げて民有地とす。所有主郎はち土木を起して、こゝに家屋を建築し、衆庶の遊憩地とす。その名けて亞公園といふもの、時の岡山縣知事千阪高雅

の命するところなりといふ。園の中央に七層の樓あり。高さ一百尺、名けて集成閣といふ。登閣料を拂ふて、上れば岡山全市は論なく、南、兒島灣を望むべく、東、東山に對し、西、御野郡を眺むべく、北、秦嶺諸山に面し、その眺願頗る濶大なり。之を降りて、その西に天満宮あり。往時の跡を追ふて新に造りたるものにて、之に隣りて天神茶屋あり。汁粉を賣る。園の北に一の家屋あり、料理を兼て旅宿を營む。これ園中第一の家屋にして、三層より成立し、室多くして、その体一、西隣に金成湯あり。寄席あり、天神座といふ。これより南に隣りて、屋宇接比し、西に折れて左に三樓軒を接して建つ。園の中央に樹木を植へて、一區を爲し、之に沿ふて球突場あり。亦、岡山市中に於ては、有數の遊憩地といふべし。

岡山神社 (石關町)

岡山縣廳の門前を東に往けば、右に一の神社を見るべし。石華表を建て、その上に岡山神社と題したる銅額を掲ぐ。千家尊福の筆するところなり。岡山神社はその由來最も古く、天正元年淨田直家社殿を造營し、慶長十八年十二月池田忠繼、華表その他建立する

ところあり。後破損するところありて。元文五年五月池田繼政新に社殿を造營す。是現今存在するところのものなり。祭神は正殿に倭迹々日百襲姫命を祭り、相殿は吉備津彦命、倭迹々稚屋姫命を祭り、合祀するところは大山咋命、武安靈命(池田光政)にして池田家の尊崇すること最も厚し。初め同神社は今の岡山城内に在りて、岡山城といひ、その麓に移して、阪下、また酒下ともいふ、寛文六年酒下を誤まり傳へて酒折とし、日本武尊を主祭とし、明治元年下宮に更め、明治十六年に至り、今の名とす。蓋、岡山城の舊に復したるなり。その創始の年月沿革詳かならざるも、中古社僧二ヶ寺あり。一を福聚防といひ、一を寶城院といふ。天文年間金光某社務たりしが、その子安藝といへるもの、神宮たり。今尙は末社に金光社といふもあり。蓋、金光なるものは、往時この邊を領したるものにて、岡山城は金光備前守宗高の小城を築きたる地なれば、その神宮たるもの、亦この一族たるを知るべし。永祿の頃社殿炎焼し、神寶、舊記、烏有に歸し、天正元年に至りて、浮田直家、社殿を造營して、これに遷座し、城内の鎮守とし、社領を寄附し、社僧一ヶ寺を増置す。これを平福院といふ。浮田秀家朝鮮に渡るに際し、

祈願を籠め、歸陣の後、甲冑八領、陣領等を寄附す。慶長六年六月五日羽柴秀秋、備前國津高郡芳賀村の内貳百二十五石を社領として寄附し、同九年十二月池田照直、同郡宮内村の内三百五石を社領として寄附し、正保四年三月池田光政、同郡一宮村長野村の兩村の内若干を社領として寄附し、以て維新の際に至れり。その役員は往時社務一名、祝部一名、禰宜五名、神子五名、掃除人一名、社僧三ヶ寺たりし。明治六年五月第一區郷社となり、同七年八月縣社となり。大祭日は五月十四、十五の兩日、中祭日は十月十四、十五の兩日なり。境内廣くして附屬の小社多く、社務所あり。神官取締本部及皇典講究分所亦此内に設置す。社の寶物亦觀るべきもの少からずといふ。

石關

岡山神社より右に折れて、往くこと二町餘にして石關に出づ。蓋、石關はこの邊の地名にして、往時浮田秀家、大石を以て堤を築き、朝日川を二流に分ち、岡山城の東西に流さしめたるを以て、この名あり。その二流の一は流の麓を東に巡りたるものにて、現に旭川の通するもの是なり。その一は西に流れて、今の上、中、下の三町の西裏及び東中

山下の東裏の間を貫通したるものなり。今はその間に在りし濠さへも、埋められて、僅に細き悪水抜あるのみ。而して今の石關は往時の石關にあらず。明治二十五年洪水汎濫してこれを決潰し、更に築成したるものなり。石關より南に望めば紙屋町に至るまで、廣き

濠 渠

あり。一面に白蓮生し、その花開き葉展ぶるに方りてや、一望總てこれ蓮にして、寸隙を剩さず。亦、是れ岡山の一佳觀。

穴 門 (内山下)

石關を斜に東すれば、門あり。之を穴門といふ。これより以往城内にして、往時はこの門より、石關に出る間、堅固なる土壁を築き、之に諸所、穴を穿ち、以て不時の用に供す。穴門を過れば

石 山 (内山下)

あり。この邊、一帯の巨石によりて組織せられ、地震もも多く感せず。往時この邊の海邊に突出したるは疑ふべからず。曾て石山大明神あり。寛文五年金山寺に移すといふ。後、この地に一の精舎を建て、稱して円務院といひ、池田家の爲に幸福を祈りしが、維新の後、廢滅して、今は唯老松幾十株の風に颯々たるあるのみ。

岡山高等小學校 (内山下)

岡山高等小學校は石山に在り。西。城濠に臨み、境域頗る廣く、地位頗る高し。その坪數は二千八百餘往時池田家の園に守たるや、西丸といひ、その家屋今尙は舊のまゝに用ゐるを以て、漸次破損し、幾んど維持すべからざるものあり。加ふるに生徒増加するにより明治二十七年及三十年更に教壇を新築し尙岡山の有志者には全部を新築せんとするの議あり、と。幸にこの議にして成るあらば、大にその面目を改むべし。生徒の總數は大抵一千二百三名にして幾んど一期毎に三百餘名の増加あり。平均千四百五名に至るべしといふ。

芳 春 館 (内山下)

石山を下れば、濠を隔て、家屋あり。その門は東に面し、堅牢にして比少し。その正

面を芳春館といひ、西に建つものを

觀風閣 (内山下)

といふ。觀風閣と芳春館とは、同一の區域に在りて、往時二の丸を稱し、舊藩主の貴賓に延接し、或は老侯の棲息するところにして、尙ほ他に家屋接比し、その下に諸士の邸宅ありたり。今は二館を途きて、總て破却し、栽うるに桃樹を以てし、その花候に方りてや、一望錦霞のごとく、天亦これが爲めに紅に、桃源に入るの想あり。二館の庭前には、胡枝花數百株を栽る、亦これ一佳觀。其他、月に宜しく、雪に宜しく、四時の景すべて佳ならざるなく。而も之を往日に視ればその變遷頗る甚だしく、著者の如き曾て父祖のごとくに居を卜したるもの、殊に感慨なくんばあざらる也。その西に巡れる城濠には紅蓮多く生ず。蓋他の城濠に生ずるの蓮は總てこれ白。而してこの地特り紅なる、亦一奇と謂ふべし。二館は廢藩置縣の後、岡山縣にて管轄せしも、明治二十四年舊城内の池田家に拂下らるるごとも、同家の所有に属したり。而してその衆庶の需に應じてこれを貸與すること前後異なることなく、諸種の宴會は多くこの二館に開かるるなり。

岡山城 (内山下)

芳春館の東に行けば、北に向ふの道路あり。これ舊城に入るの地にして、往時は木橋を架して、往來を通ず。俗に太鼓の橋といひ、その北に屹立する門を太鼓の門といふ。蓋、塔の門の側に守衛あり、太鼓を搦ちて、時を報せしを以てなり。之を過ぎて東に向ひ、また西に向ひて隘道を攀れば、曾て鐵門を設けたるの地あり。これより左右意のまゝに天主閣の許に到るべし。抑も岡山の城たる、浮田能家の旗下の將金光備前守宗高の小城を築くに洵まるものにて、この地、一の沙山たり。かの石山、天神山及びこの岡山の三嶺東西に聳ち、南は海に接し、近く松風の音凄く、西は朝日川に臨み、東は今の瓶井山の麓に至るまで、一面の水流にして、人家遠く、山の北に下出石の村ありて、人烟稀少なりし。今の出石町は往時の村落にして、塔の市町となるに及びて、尙ほその名を西川の西に移し別に出石村を設けたるなりといふ。傳へいふ、今の芳春館の邊に金光山岡山寺あり、浮田秀家、塔の安置するところの觀音の靈夢に逢ひ汝、前生世々の善果に感して、三國の主となれり願くは敷地の内に、塔の居城を築き、以て利民安世の政

を布けよ、と。因て岡山寺を今の磨屋町に移し、其の敷地を城廓とし、曾て兵火の災なく、眼に旗旗を見ず、耳に鐘鼓を聴かざりしも、慶長五年庚子關ヶ原の役西軍、利を失ひ、秀家流配さるゝに至り、其の殘黨の岡山城下に在るを疑ひ、火を放ちて市街を燒きたるも、城廓は依然として毀れず。金吾中納言秀秋之に居り、後、池田忠繼に賜ふ。忠繼世を早くし、忠雄嗣ぎて之に居り、忠雄死するの後、光政代りて之に守となり、以て維新に至るまで、池田家の居城たり。城は東北に朝日川を控へ、南西は濠を以て圍み、四方に櫓樓を築きたるも、今は毀ちて、僅に斷礎の存するを見るのみ。人をして自から離黍の歎を發せしむ。幸に天主閣の巍然として存するあり。略ぼ往時の状態を察するに足る。

岡山尋常中學校

岡山縣下に尋常中學校三あり、曰く岡山、曰く津山、曰く高梁、而して其の岡山に在るものを以て最も大なりとす。初め尋常師範學校と併立せしも不便甚だしきを以て、別地を岡山城内に卜し、竟に新築せり。地は城樓に接し、教場に講堂に總て宏壯なりと謂ふ可らずと雖も、地位高爽にして且一点汚塵の入るなく、東は三權の諸山を仰ぐべく、南は旭川の清流を望むべし。寄宿舎亦これに副ひ、千有餘の生徒を有つ。校舍に耻ぢずといふべし。而してこの校の新築されしより太鼓の門に門衛を置き、人の妄に入るを許さず。

岡山製絲會社 (内山下)

岡山城の直下、旭川の西岸に、烟突の聳ゆるものを、岡山製絲會社なりとす。近年創立したるものにして、家屋亦た新築に属し、亦たこれ岡山にて指を屈するの製造所なりとす。濠を隔てて其の南に高く烟突の聳ゆるものを

岡山精米會社 (内山下)

とす。蒸氣機關を据ひて日夜精米し、春聲絶ゆることなし。其の門に對するの一小館を

行餘館 (内山下)

とす。もと岡山藩老日置某の老を發したる處、今は第三高等學校醫學部職員等の集會の用に供する所なりとす。岡山製絲會社の對岸に見ゆる一區畫は

荒手屋敷 (古京町)

と稱し、もと池田藩老臣伊木某の別邸たりしも、今は池田家の有に歸し、其の庭園幽雅にして風致あり。通常人の入るを許さず。

岡山縣測候所

岡山精米工場の南に當りて屹とし聳ゆるものを岡山縣測候所とす。地は旭川に臨みて稍高く、其の構造疎雑なりと雖も、頗る地位の宜しきを得たるものとす。

岡山縣病院 (内山下)

岡山城を出で、舊路をとりて、高等小學校の南を出づれば、宏壯なる家屋あり。之を岡山縣病院とす。院は舊と亞公園の有る地に設けしを、明治二十三年ここに新築し、翌年移りたるものにて、其の器具等の完全せる、蓋わが國に於て稀に見るところなりといふ。ここを以て其の來りて治療を乞ふもの、常に院に滿つ。

第三高等學校醫學部 (内山下)

岡山縣病院の南に在るものを、第三高等學校醫學部とす。其の境域廣潤にして、其

の屋宇高爽たり。初め今の高等小學校の有る地に設けしを、病院を新築するときに、共に新築して、ここに移れるものにして、内山下の中央を占め、病院とともに、岡山の一偉觀なりとす。その南に高く烟突の聳ゆるものを、

岡山電燈會社 (内山下)

とす。明治二十七年創立したる者にて、日漸く没せんとするや、忽ち全市街に光を送り、數條の電線に不夜城を現出すべし。わが友毛子眞曾て電燈を咏す。曰く

莫是長繩繫未光。靈輝炳耀照華堂。補天煉石憐蝸氏。回日揮戈笑魯陽。紅影穿林棲鳥

噪。清暉入水蟄龍狂。機工微妙神難及。造出人間白玉鄉。

絶新の題目、爛熟の典故を用ゐ、而も筆々生動す、良工にあらざれば作る能はざる也。

岡山縣病院の北を西すれば、

中の町

に出づ。中の町は岡山市中の大道にして。その北を

上の町

とし、南に往けば

下の町

あり。町の西側に

岡山郵便電信局 (下の町)

あり。局は素と市民の家屋を用ゐしに、一朝火災に罹り、爲に新築したるものにて、當時は逓信管理局たりしも、後、郵便電信局となり、尙ほこの家屋を用ゆ。地方の郵便局にては、蓋、稀に見るとあるなり。

榮町

下の町を過れば、榮町なりとす。町の西側に

山陽新報社 (榮町)

あり。山陽新報は明治十二年創立せるものにて、岡山は新聞紙の起仆頗る多きも、その年月の久きは特り山陽新報あるのみ。榮町の極るとある。

岡山警察署 (榮町)

あり。家屋三層より成立し、その境域廣からずと入るも、四方より望むべく、その北に

鐘樓 (榮町)

あり。藩政の頃より現存するものにして、その樓の建築頗る堅牢なり。番人ありて、常に時を報つ、水火の警あれば、亦之を報つ、その聲全市に偏く、人皆な之れを便とす。榮町を過れば

紙屋町

なり。岡山銀行あり、近時新築する所のものとす。これを過れば

西大寺町

に出で、東すれば

橋本町

なりとす。上の町より、まゝに至るまで岡山全市中の最も繁榮なるとするにして、百貨備はらざるなく、往還亦國道に屬し、平坦砥のごとく、眞に中國の都會たるに負かずと

いふへし。橋本町の窮る處

四海樓 (橋本町)

あり。割烹を業とす。樓に上れば東山の勝眼に入り、旭川の流手に在り、眺望絶佳。

京橋 (橋本町)

京橋は橋本町の極東に在りて、旭川に架するものなり。その長さ七拾間餘にして、曾て木造たり。その堅牢なるを、亦た類少きものにして、その橋柱のまどき、幾十數年を経たるものあるも、毫も腐蝕せざりしも、明治二十五年七月二十四日旭川水潦あり。岡山ありて以來稀に見るとある、全市幾んど水のため没せられ、京橋亦たその中央を斷たる。翌年またく水潦あり竟に毀落し、近時新に架設せりと雖も、疎雑にして見るに堪はず。幾んど風景の一半を滅殺せり。

魚市場 (橋本町)

旭川の西岸、京橋の北下に於て、毎朝魚市場を開く。魚舟は遠く兒島地方より來り、その數、幾十艘といふを知らず。魚買まゝに群集し、其の價を争ふ狀。またまれ一の奇觀たり。その市を開く、概ね午前六時前にして、同八時前に至りて止む。

納涼

岡山に於て、その最も賑しきものを擧ぐれば、京橋の納涼亦その一たり。盛夏の候に方りてや、旭川の東磯に茶屋を掛け、酒食を供へて客を待つもの、その數、百餘、各軒に紅燈を吊り、力めて人目を惹く。夕陽既に収れば男女群を爲して、その地に集り、その雑沓最も甚たしく、その間觀世物を出すあり。劇を演ずるあり。而して遊客の妓を涼棚に招きて、興するあり、老人の相對して碁を圍むあり。絃歌湧き、鼓鐘響き、而して涼を納るゝの船亦た紅燈を吊りて、其の艶なるを競ひ、一帶の清流、爲めに紅となり、寧ろ清味の何處に在るやを知らず。其の甚たしきは、夜を徹するものありと云ふ。

中島

は旭川の東岸に在り。其の由來を討るに、文祿二年羽柴秀吉、宇喜多直家に説き、朝日川の間間に二條の町を作る。之を東中島、西中島と名け、石切半入といふ者に賜ふ。初め秀吉、清水長左衛門を高松に攻め、後毛利家より軍を進めけるに、秀吉、其の兵寡く

兒島に至りて、援兵を乞はんとし、從者六名を隨へ、備前國宮崎に至り、兒島の山伏尊龍坊の居宅を訪ふ。一士人あり、秀吉を導き、藤戸の渡を過き、引馬の峠を越る、林權現山伏の居に至る。秀吉、尊龍坊に加勢を乞へども、從はず。則ち小舟に乗じて、下津井より岡山に至り、宇喜多直家を説き、兵を催はして備中に至り、終に和成る。かの秀吉を導きたるものは、石切久兵衛といふものにて、彼の恩賞として、中島を興へたるものなり、と。彼の半入と稱するは、片髪薄く剃り下げ、彼の容奇なるを以て、秀吉の名けたるにて、彼の子孫久しくその地に住したりといふ。

遊廊 (西中島町 東中島町)

岡山は藩政の時遊廊を許さず。後縣を置かるゝに至りて、中島を許可地とし、今幾んど彼の要部を占め、西中島は旭川に臨み、東中島は彼の支流に臨み、貸座敷の惣數六拾四にして、娼妓の數壹百四拾、夜々絃歌湧くがごとく、何れの痴漢ぞ、來りて、彼の泥中に國寶を投するものぞ。

劇場旭日座 (西中島町)

はまた西中島に在り。高砂座と同時に新築し家屋宏爽にして、旭川に臨み、高砂座と東西相對して岡山の二大劇場たり。

旅宿

多く、往時はこの地の他に見る稀なりしも、今は諸所に散在し、この地に來るものは、概ね下流の客たるに過ぎず。西中島と東中島との間に架するとするの橋を

中橋 (中島町)

といふ。この橋の西に一小社あり。

梅檀稻荷神社 (西中島町)

といふ。梅檀の老樹、社殿を掩ひ、路傍の一小社に過ぎざるも、遊廓の主人娼妓輩の尊信するにより、彼の名市中に高し。

環翠尋常小學校 (小橋町)

中橋を渡りて、北に方り、白壁輝くところの家屋あり。之を環翠尋常小學校とす。その邊桃樹頗る多く、自から佳致あり。その間亦防水堤防あり、河西のものと共に新に築

きたるものにして、南、花畑より、北、古京町に至る。

小橋 (小橋町)

は中橋を過ぎて、橋の東に架するものたり。ふれを渡りて右に折れ、東すれば、左に一の禪門を認む。門前「暈酒不許入山門」の石標殿として存在し、門の上に、「万蔵山」の額を掲ぐ。舊藩主池田章政の筆に係るものなり。ふれを

國清禪寺 (小橋町)

とす。門内松株鬱茂し、橋の本堂に至るまで、赤砂を散布し、掃除至らざるなく、橋の幽邃閑雅にして、清淨高潔なる、岡山第一の梵宇とす。寺は池田家の菩提所にして、橋の國清の二字は、濫祖の諡字に據るものなり。支院二三あり。境域廣潤にして、且つ本堂清壯たり。寺僧十數名ありて、寺主之を率ひ、毎朝市中を巡廻して讀經し、未だ曾て怠らす。寺に書畫を藏す。蓋、觀るべきものあり。寺の東に道あり。之を沿ふて東すれば、

東山公園 (門田)

に至る。東山公園は一に借樂園と稱し、境内に招魂社あり。戊辰の亂、及び西南の役に戦死せしもの忠魂を祭るところにして、招魂碑二基あり。その一に云く

嗚呼生則致力于 聖天子。死則享賢公之祭祀。是豈非士平日之至願哉。明治元年戊辰正月。聖天子新親万機。更張綱紀。然而有頑然暗順逆、敢抗 王命者。於是大興六師。以征之。既而逆徒服其威德。悉歸順焉。此役也。吾藩士卒勇戰。殞軀命者不尠矣。吾公嘉其忠烈。爰設招魂之場。以祭其靈焉。二年六月建碑勒之。永爲臣子之明鑑矣。國老伊木忠澄謹撰。

これ、招魂社の起源にして、爾後毎年四月二十六日らの祭典を執行し、有志の徒は種々の武技を奉納し、烟火戯を打ち揚げ、時宛かも櫻花爛熳たるの候なれば、士女の雜沓すること、一層甚たし。社の傍に土倉一草、高田小洲、加藤次郎等の碑あり。皆な西薇山の撰文にかゝる。山上に

東照宮 (門田)

の祠あり。初め寛文二十年池田光政、東照權現を勸請せんと欲し、之を時の徳川將軍に

請ひて許され、江戸より勸請し、道中は國老壹名、物頭二名、諸士拾名その他卒供奉し、伏見より御座船にて大坂に出て、新に船を造り之に奉じて岡山に入り、國老一名、國境に迎へ、藩主自ら之を川口に迎へ、命じて神社を東山に經營せしめ、こゝに祭祀し、正保三年初めてその祭禮を執行し、神輿を御行旅所に渡し、その式の嚴なる、他に比なく、當時祭禮の前日光政自ら通路を巡檢し、當日早天參拜したり、といふを以ても、その一斑を知るべし。然れば池田家代々之を尊信し、維新以前は招魂社の麓まで、垣を結び、妄りに人の出入するを禁じ、その山門には下馬の制札を建て、頗る威嚴を存せしも、今は衆庶の僭樂に供し、その傍に在りし社僧地も或は開かるゝあり。試みに登臨せば岡山市中はいふに及ばず、兒島灣に至るまで、總て來りて眉睫の間に聚まり、人をして心胸を快豁ならしむ。東照宮の南につゞきて

玉井宮 (門田)

あり。亦これ一雅潔の神社、縣社に列し、岡山市中旭川の東に住むものは、その氏子たり、社内に老松の蜿蜒たるあり。紫藤の蔓延するあり。春時最も人の參詣する多し、傳へらふ、玉井宮はもと岡山の東南海上二里の地米崎に在り、米崎の突出するところを光明崎といふは、玉井宮の御燈光明かにして、常に海上を照し、船に乗るものゝ便とせしによるものにて、後、その神社を今の地に移すや、始めてその嶺上に御幣を建つ。因て神社の後の山を稱して幣建山といふなり、と。蓋、神社に今尚は海上の安全を祈りて、燈籠、石柵を寄進せしものあるは、之か爲なりとす。東照宮と一路を隔て、北に聳ゆる山に、

三勳神社 (門田)

あり。維新の後建設せるところにして、和氣清磨、楠正行、兒島高德を合祀するものとす。當時士氣激昂し、力めて勤王の志を起しめんとしたるなれば、この社の建設亦幾分かこの意より生じたるものにして、その清磨と高德とは、本州の人たるにより、正行は池田家の藩祖に縁故深きを以てなり。この山、東照宮所在地に比すれば、頗る高く、隨ふて眺望亦た潤大なれども、阪路較や急なれば、婦女等の上るもの甚だ少し。

少林寺 (國富)

三勳神社を降りて、東すれば、西大寺、サテは上寺に到るへきも、歩を轉じて北に往けば、小林寺あり。庭園幽雅にして春時遊人來り訪ふ。寺の前に別に一字あり、五百羅漢を安置す。長、各、文餘、亦た一顧すべきもの。

瓶井山 (澤田)

瓶井山は少林寺の北に在り。寺院二三あり。多く廢頽し、人の訪ふ稀なるも、塔ありて山上に屹立し、岡山の爲に一の佳景を作す。之を旭川の西岸より望めば、幾んど京都東山の光景あり。これより西すれば國道に出で、東北に往けば、播磨に往くべし。途を南にとりて、小橋町に出で、再び國清禪寺の西に沿ひ、南に往けば、

行幸堤 (花畑)

あり。この地頃の老ひたる多く、從來、畷野の民住居し、不潔言はんかたなかりしも、明治十八年東郷西狩の際、退去せしめ、道路を廣め、大にその面目を更め、つゝきて柳樹十數株を栽る、いよく風致を増す。その尽る處に碑あり、建つ。題して「行幸堤」といひ、その背面に時の岡山區長手代木勝任の國詩一首を刻す。

岡山紡績會社 (花畑)

行幸堤を過ぎて、南すれば、數町ならずして煉瓦石屋の旭川東岸に建築せられしを見るべし。これを岡山紡績會社とす。曾て一たび火災に罹りたるも、愈よその事業を擴張し、職工數百人、晝夜の業を執り、内には電機燈を使用し、蒸氣機關を運轉し、烟筒突屹として中天に貫ぬき、涼風隨々として響を絶えず、販路頗る廣くして、その名、世に知らる。門前に老松二株あり。宛も龍の蟠まるごとく、亦これ、この地の一佳趣。

岡山精米會社 (網濱)

旭川の堤防に沿ふて、南下し、網濱に至れば、岡山精米會社あり。煉瓦石屋にして、烟筒空に聳ゆ。これより進みて、愈よ南すれば、終に

三幡港 (江並)

に達す。港は岡山を南に距る一里餘の港口にして、東西の漁船皆なこゝに輻湊し、日に數回往復し。大阪、神戸、四國九州に往んとするもの、皆な此よりし、所謂岡山の港なり。山陽鐵道の開通するより、神戸、大阪に往復するの客は、較や減少したれども、

三勳神社を降りて、東すれば、西大寺、サテは上寺に到るへきも、歩を轉て北に往けば、小林寺あり。庭園幽雅にして春時遊人來り訪ふ。寺の前に別に一字あり、五百羅漢を安置す。長、各、文餘、亦た一顧すべきもの。

瓶井山 (澤田)

瓶井山は少林寺の北に在り。寺院二三あり。多く廢頽し、人の訪ふ稀なるも、塔ありて山上に屹立し、岡山の爲に一の佳景を作す。之を旭川の西岸より望めば、幾んど京都東山の光景あり。これより西すれば國道に出で、東北に往けば、播磨に往くべし。途を南にとりて、小橋町に出で、再び國清禪寺の西に浴ひ、南に往けば、

行幸堤 (花畑)

あり。この地頃の老ひたる多く、從來、卑野の民住居し、不潔言はんかたなかりしも、明治十八年、車駕西狩の際、退去せしめ、道路を廣め、大にこの面目を更め、つゞきて柳樹十數株を栽る、いよく風致を増す。この尽る處に碑あり、建つ。題して「行幸堤」といひ、この背面に時の岡山區長手代木勝任の國詩一首を刻す。

岡山紡績會社 (花畑)

行幸堤を過ぎて、南すれば、數町ならずして煉瓦石屋の旭川東岸に建築せられしを見るべし。これを岡山紡績會社とす。曾て一たび火災に罹りたるも、愈よこの事業を擴張し、職工數百人、晝夜の業を執り、内には電機燈を使用し、蒸氣機關を運轉し、烟筒突屹として中天に貫ぬき、涼風塵々として響を絶わす、販路頗る廣くして、この名、世に知らる。門前に老松二株あり。宛も龍の蟠まるごとく、亦これ、この地の一佳趣。

岡山精米會社 (網濱)

旭川の堤防に沿ふて、南下し、網濱に至れば、岡山精米會社あり。煉瓦石屋にして、烟筒空に聳ゆ。これより進みて、愈よ南すれば、終に

三幡港 (江並)

に達す。港は岡山を南に距る一里餘の港口にして、東西の漁船皆なこゝに輻湊し、日に數回往復し。大阪、神戸、四國九州に往んとするもの、皆な此よりし、所謂岡山の港なり。山陽鐵道の開通するより、神戸、大阪に往復するの客は、較や減少したれども、

今尚ほ盛なり。岡山に名高き

白魚、蜆

は多くこの邊にて漁獲するものなり。これより再び舊路に復り、平井村邊より船を雇ふ

福島港 (福島)

に渡れば、亦これ、一の村落たり。往時はこの港に和船の出入するもの、頗る多く、
娼樓あり、一時盛を極めしも、旭川の漸く埋没し、漁船の往復するに至りて、人のこの
地に至るもの稀なり。然れどこの地に

住吉神社 (福島)

ありて、毎年七月十五日祭典を執行し、當日は納涼をかねて、参詣するもの踵を接し、
小舟のこゝに集るもの、幾十艘たるを知らず。岡山近地稀に見るの雑沓なり。これより
北に至れば七日市に出づ。この地に

春日神社 (七日市)

あり。社は縣社にして、春日明神を祭る。岡山の南部の氏子多く、境内亦廣く、自から
幽閑の趣あり。傳へいふ、春日大明神の額は往古南都春日野の鹿、口に啣みて、この地
に來り、旭川の濱に臥して死す。その額を納めて、春日大明神を祀る。その鹿の死した
る額を名けて、額鹿瀨とす。

岡山監獄 (二日市町)

春日神社の前を過ぎ、旭川の西岸を北に往けば、二日市に出づ。この地に岡山監獄あり
。再度火災に罹り、近來またしく新築し、その境域いよく廣くなり、中に工場備はり
、種々の工業を執り、中にも錦莞庭のごとき、他に比類なきものなりとす。監獄の近傍
に

魚市場 (二日市町)

あり。京橋邊と毫も異なるどころなし。

清輝尋常小學校 (船頭町)

清輝尋常小學校は船頭町に在り。旭川の西岸にして、魚市場より北に往くこと數町、

の家屋、火災を経て、新築したるものなるを以て、頗る清潔なり。その西に方り、南に北に通ずる道路あり。これ亦た船頭町といふ。寺あり、

妙勝寺 (船頭町)

といひ、日蓮宗に属し、寺院廣潔にして、市内有数のものたり。曾て日誠上人といふものあり。この寺に住持たり、字を察信といひ、相模國三浦莊に生れ、後、大僧都となり、法印に上る。度世六十一年にして歿す。時に七十二。京都深洲寶塔寺に荼毘し、遺骨を、この寺に葬むるといふ。

本願寺 (山科町)

妙勝寺より北に往き、西に折れ、山科町に至れば、本願寺あり。いよく西して、小原町に至れば、寺院二あり。一を

光清寺 (小原町)

といふ。近年この寺の附屬地に、岡山威化院を設けたりしも、意に廢滅せり。小原町の以東に在るの町を、高橋町、兒島町とし、この間、亦、寺院數ヶ所あり。その西に在る

の町を、平之町、藤野町といひ、

菓子製造者

頗る大く、幾んど戸毎に之を製造するがごとく、その販路頗る廣しといふ。兒島町を北すれば、紺屋町に出づ。町に

耐火煉瓦製造所 (紺屋町)

あり。その製造するところ、頗る世の好評を博し、第三勸業博覽會に於て、有功賞を得たるものにして、その初、稻垣平衛氏、原料を選擇し、資産を擲ち、幾十回の試験を経、刻苦經營して、起せしもの、その家屋宏壯ならざるも、境域廣く、烟筒空に聳るて、其竈に一時に三万餘を製造すといふ。抑も氏が斯業を起すや、外に之を助くる者なく、内に財源の限あり、萬患蟻集の中に立ちて毫も屈せず一意實業の爲に盡す。亦た多とすへきものある也。

明習館 (天瀬)

耐火煉瓦製造所の北に對し、一區域を爲すものあり。明習館といふ。岡山監獄看守押丁

等の文武を講習するところとす。

保護院

保護院は明習館の内に設置せるものにして、放免の囚徒を改善せしむるの目的なり。英照皇太后薨御あらせらるるや特に各府縣に賜ふに慈惠金を以てせらる、本院亦實にその惠に頼らんとするもの、幸に其實効を擧げ得ば即はち可るの。東に

錦莞製造所 (天瀬)

あり。この地もと晩翠小學校と稱し、岡山區第三番學區たりしも、尋常小學校を設くるに及びて、これを廢し、その家屋地所を拂下げ、ここに錦莞製造所を設立するに至れり。抑も錦莞は岡山の名産にして、その外國に輸出するもの頗る多く、近來この地方に蘭作の多き、實に之に因らずんばあらざるなり。錦莞製造所の東に路を隔て、

岡山米商株式取引所 (天瀬)

あり。初め岡山に米商會所ありしも、中途之を廢し、後、之を再興せんとするも果されりし。後に米穀市場を設く。米穀市場はもとより米商會所と、その種類を異にすれ

ども、その地位最も接近したるがゆゑに、幾んどその景氣を復したるの觀あり。明治二十七年に至り初めて取引所の許可を得大に盛といふ。紺屋町を北に往けば、

可眞町

とす。この地天瀬の内にして、割烹店軒を並べ、中に就て

花月亭

その最もなるものとす。樓に貯ふところの藝妓拾有餘名にして、岡山三大樓の一とす。之を過ぎて西大寺町に出で、西に往けば俗に新西大寺町といふ。右に折るれば東中山下とす。往く數町ならずして。右に

中國民報社 (東中山下)

あり。明治二十五年創立する所なり。その西に路を隔て、

岡山市役所 (東中山下)

あり。もと舊藩士の邸宅にして、家屋も亦、舊に依る。さよ／＼北すれば、

黒住教會所 (東中山下)

あり。ろの構造疎略にして、もとより見るべきものなし。蓋、ろの本社の近きを以てならん。

基督教會堂 (東中山下)

黒住教會所を北に距ること、壹町ならずして、基督教會堂あり。近年新築するところにして、二層より成立し、洋館に摸したるものとす。稍北に往けば、右に

千歳座 (東中山下)

あり。一の寄席にして、近年新築したるものなり。東中山下を北に往きて、右に折るれば、

岡山地方裁判所 (弓ノ町)

あり。家屋は近年新築したるものにて、ろの境域頗る廣し。これより再び西に往けば

西中山下

に出で、南すれば、右に

直税分署と間税分署 (西中山下)

あり。舊藩士の邸宅を憫るものにして、ろの南に

大隊區司令部 (西中山下)

あり。亦、これ舊藩士の邸宅を憫るもの。

岡山日報社 (西中山下)

は西中山下に在り。今山陽新報、中國民報と併せて鼎立せり。尙南すれば

深抵尋常小學校 (西中山下)

の本校あり。明治二十四年新築したるものにして、惣坪數一千七百。生徒の數一千二百にして、校舎は美麗ならずといへども、雅潔なり。運動場廣潤にして、西は柳川に接せり。西中山下の南極るところ。

松の江樓 (西中山下)

あり。岡山三大樓の一にして、藝妓貳拾餘名を貯はへ、ろの家屋宏壯、ろの庭園幽雅、今は變つて旅館となるも、尙は宴をこゝに開くもの多し。これを過ぎて新西大寺町に出で、右に折るれば、常盤町新柳川筋に出づ。これより斜に東南に至れば

劇場高砂座 (大雲寺町)

あり。初めこの邊は外濠に属したるを埋めたるものにして、その家屋は煉瓦石造と木造とに分ち、二拾二間に拾八間とし、外には庭園を設けたりしも、近頃之を破壊し、大に風景を損したり。然れど場の粧飾、地の便利等固より岡山第一の劇場たるに負ざるなり

大雲寺 (大雲寺町)

劇場高砂座の南に一寺あり。大雲寺といふ。その町を大雲寺といひ、日限の地蔵を以て名あり。その縁日には參詣するもの頗る多し。大雲寺の東に方りて、一の寄席あり。

巴玉座 (天瀬)

といふ。またこれ近時の新築にして、千歳座と南北相對して、岡山の二大寄席たり。

瓦町

は大雲寺町の西に連るの地にして

景福寺 (瓦町)

あり。禪宗に属し、寺内に天満宮を祭る。次に

正福寺 (瓦町)

あり。寺院廣からざれども、頗る雅潔なり。これより西すれば

大供

に出で、御野郡に属し、

黒住神社 (西中野)

に至るべく、神社は中野村に属し、大供よりは一里にして近かるべし。この街道は庭瀬、玉島、笠岡、備後地方に往くを得べし。再び舊路に復りて、大雲寺町より北に折れ、

濱田町に至れば

報恩寺 (濱田町)

あり。いよく北に往き東田町に至れば

蓮昌寺 (東田町)

あり。岡山第一の巨刹にして、その堂宇の宏潤なる類稀なり。同寺は佛住山といひ、初め岡山城大手筋に在りしを、後に森下町に移し、復た今の地に移したるものにして、

康正三年大覺大僧正妙實聖人の創立に係る。妙實は日像上人を推して、開祖とし、自ら二世と成り、本山は京都妙覺寺にて、七堂伽藍を備へ、境内に支院八あり。この寺の第一寶物は大曼荼羅にして、唐紙七拾八枚を繼ぎて成り、開山日像の眞筆にして、毎年陰曆三月二十八日より十二日間開扉し、五精豐饒を祈り、善男善女の參詣するもの、踵を接し、香火絶ゆることなし。境内に守護神あり。最尊一丸大明王といふ。毎月一日を以て縁日とし、晝夜參詣するもの頗る多し。蓮昌寺の裏門を出で、磨屋町に至れば

藥師院 (磨屋町)

あり。今眞言宗法務支所の有るところにして、浮田秀家の上道郡沼城より岡山城に移るに方り、沼城の木材を以て營造するところなり。開基は僧津梁にして、その縁起を尋ねれば、上道郡平井村にて漁夫の海中より得たる佛像を安置したるにて、今に至るまで、その佛体に觸殻の附着するを見るといふ。寺院亦廣くして、境内に支院多かりしも、今は敗滅に歸したるもの二三あり。藥師如來の本体は舶載の物に係はるといふ。その縁日は毎月二十一日にて、その最も盛なるは、三月なりとす。

岡山寺 (磨屋町)

岡山寺は藥師院の西二丁餘の地に在り。金光山といふ。人皇四十六代孝謙天皇の御宇、天平勝寶元年勅命を奉りて、報恩大師開基するところにして、古昔岡山城の第二廓の内に在り。その後人皇六十二代村上天皇の天曆年間、信源上人重て七堂伽藍を再興し、天正年間浮田直家の岡山城に入るや、今の地に移したるものにして、本尊は千手觀音とし、脇立四天王、天台傳教兩大師なり。その縁起によれば、昔、本州唐河の邑に一民あり、姓は金光、名は某、常に漁業を事とす。或時岡山に往き靈光の石中に在るを見、之を穿ちて千手觀音大悲の金像を得たり。長一寸計、時に神人來りて新に二尺八寸の木像を刻み、かの靈像をその胸中に安置し、終に梵堂を岡山の傍に作り、金光山岡山寺と号す。そのの藏するところの寶器には善光寺如來御手判金塗厨子入善光寺如來三國傳畫三幅、弘法大師筆、不動尊像一幅等なりといふ。磨屋町より再び柳川筋に出れば

岡山大林區署 (西中山下)

あり。曾て小林區署を置きたるもの、明治三十年大林區署を設けらるゝや小林區署を他

に移して其跡に入れり。柳川に沿ふて北に往けば

本行寺 (山崎町)

あり。日蓮宗にして、堂宇やう宏壯なり。いよ／＼北に往けば難波町に入り

妙應寺 (難波町)

あり。寺院壯麗にして舊觀を改めず。難波町の西を市の町とす。次を丸龜町とす。町に

金刀比羅神社 (丸龜町)

あり。社殿狭小なれども、人の參詣するもの鮮からず。その西を野田屋町とす。

劇場柳川座 (野田屋町)

あり。岡山にて第三位に在るものなれど、近年新築し、大に面目を更めたり。然れどこの坐に來り演ずるの俳優は多くはこれ地方の小家數なり。柳川座より南に距ること、數町ならずして、一の青樓あり。名けて

一富士 (野田屋町)

と云ふ。亦これ一の青樓、岡山三大樓の一にして、藝妓を貯ふこと二拾名に過ぎ、その

地一方に僻在したれども、家屋雅潔たり。或は評するらく、松の江は月に宜しく、一富士は雪に宜しく、花月は花に宜しく、と。蓋、花月は庭園に櫻樹數十株ありて、その花の開くに方りては、香雲漠々として、夜の景尤も可なり。松の江の樓臺廣潤にして、而もその庭園の雅潔なる、月に宜しきは論なく、亦、雪にも頗る適す。獨り一富士光景の觀るべきものなきも、その密雪天地を鎖して、峭寒骨に徹するの時、爐を擁して、淺酌低唱すれば、又、一種の趣味の裡に在るべきか、これらの雪に宜しといふ所以なるか。わが知るところにあらざるなり。

料理屋と藝妓

岡山の三大樓を寫し了りたるにより、ここにその他の料理店を擧ぐれば、その數百七拾有餘、藝妓の數を擧ぐれば七拾有餘、その他に町藝者と稱するものあり。而してその料理屋と稱するものは、大なるあり、小なるあり、群集に宜しきあり、密友相會するに宜しきあり。その名の同トきを以て、その實の異なるを推さば、誤まれり。その重なるものは、大黒屋、藤久、山佐、豊崎、常盤木、魚嘉、山啓等にして、三好野花壇は市外なれ

とも、停車場の傍に在りて宿屋を兼ね。

旅店

はらの數壹百三拾有餘にて、その重なるものは三好野花壇(上出石村)、自由舎(上之町)、松の江(西中山下)、三好野(西大寺町)、魚嘉(細屋町)、常盤木(亞公園)、池田(川崎町)、魚春(石關町)等にして、水田(紙屋町)、高橋屋(新西大寺町)のとき、人を容るゝの多きを以て名あり。

西川

野田屋町の西に川あり。西川といふ。旭川の支流にして、岡山の南北を貫流し、その西岸を西川といひ、多くは舊藩士の邸宅にして、人家稠密したるも、別に寫すべきものなし。西川より上出石に出づれば

備前紡績會社

あり。近時の創設に係るものにして、其構内頗る潤し。その東北に當りて岡山銀行の倉庫部

あり、またその境域甚だ潤し。これを過ぐれば則ち

岡山停車場

にて、その足の至らざるどころあるも、幾んど岡山を一周し畢れり。その詳細を寫さんと欲せば、小冊子の能く盡すべきところにあらず、乃はちこゝにその大略を記して、岡山名所の指南車とすとす。

訂正 岡山名所圖會畢 増補

自ら岡山名所圖會の後に題す

わがこの書を著すや、實に明治二十五年の秋に在り。爾來倏忽六年、その岡山の面目を改むるもの、一にして足らず、而も果して商工業の隆盛に赴きたりと謂ふべき歟。わが曾て期する所のもの、決して斯の如きにあらざるなり。六年の歲月短なりといふべからず、而してその變遷する所斯の如きのみとすれば、豈嗚然たらざらんや。而も進歩は即ち進歩なり。これを一步すれば則ち一步の効あり、然らば則ち尙止むに勝れるなり、われは尙今後ますます進みて、他日この書を訂正するに至らば則ち全くこの稿を改めんことを希ふなり。人あり、曰く子の言や善し、而も六年の間の文章果して進むものあるか、子の學識果して加ふる所あるか、子や世に容れられず、去て海隅に隠れ、而して尙且岡山の進歩の遅々たるを罵る、抑も何ぞやと、われ無然として言無し。乃ち書して他日の進境如何を見んとす。

明治三十一年春二月兒島灣頭漁歌聲裡に筆を擲る

(正訂岡山名所圖會具付)

明治三十一年	五月一日	訂正増補第五版印刷
明治三十一年	五月七日	發行
明治廿五年	九月四日	印刷
明治廿五年	九月五日	出版
明治廿七年	六月五日	第二版發行
明治廿九年	二月十日	第三版發行
明治三十一年	五月廿八日	第四版發行

正價拾貳錢

岡山縣岡山市大字上ノ町六十番邸

北村長太



岡山縣岡山市大字野田屋町百二十二番邸

武田昌三郎

岡山縣岡山市大字上ノ町六十番邸

細謹舍

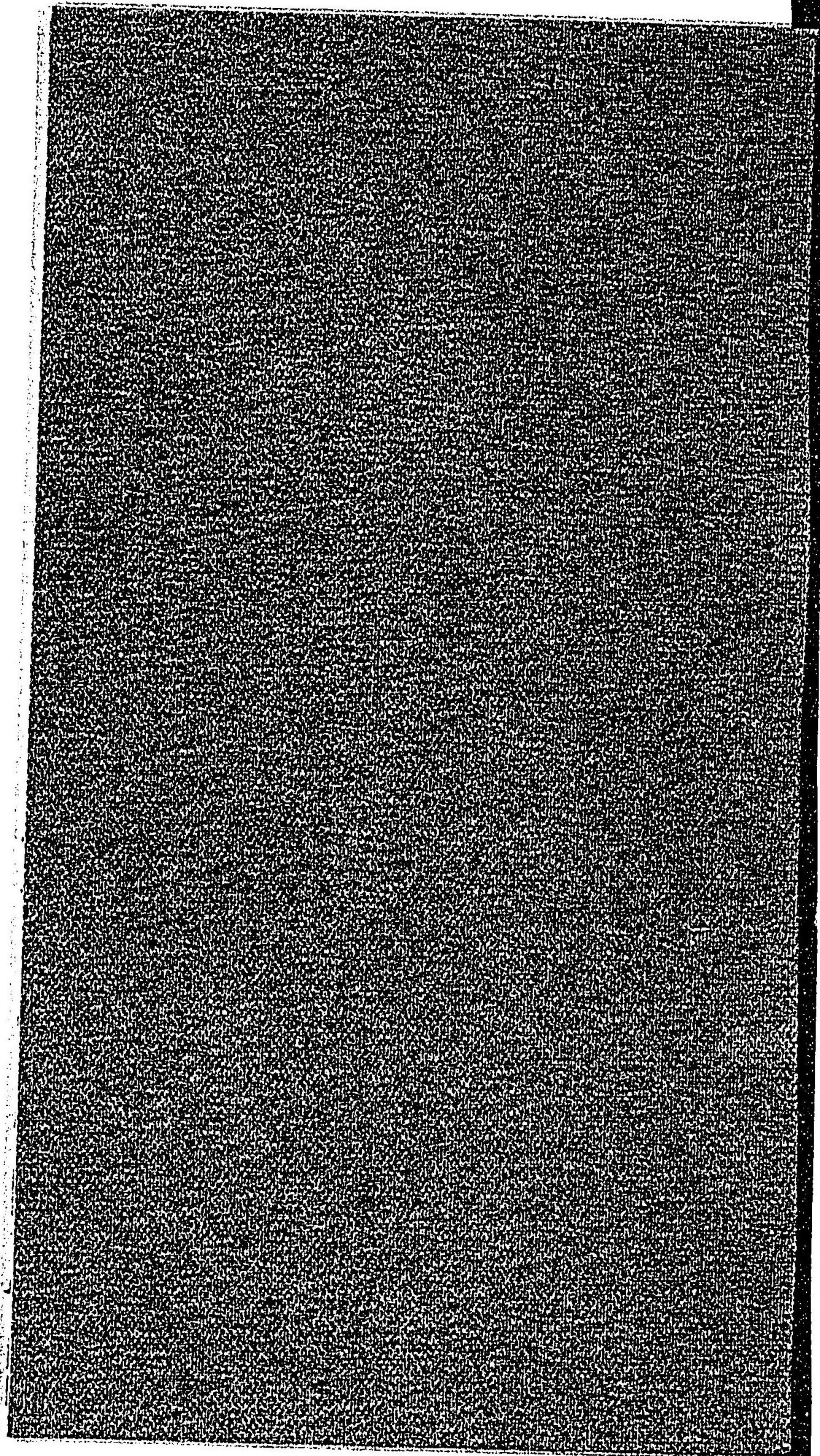
版權所有

編纂者兼
發行者

印刷者

發行所

et 249





025816-000-1

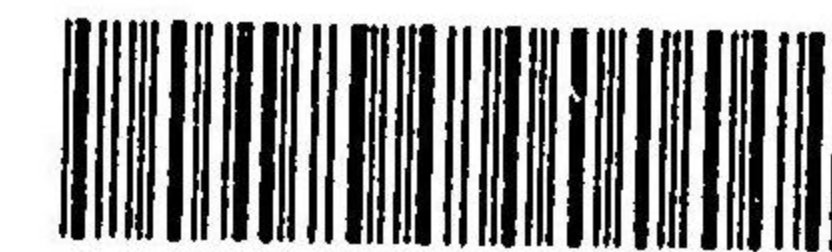
特29-522

岡山名所図会

北村 長太郎 / 編

M31

ADC-3357



特